

# 大齋期の月曜日早課(抄)

注意 譜面中、五線譜上に **||ol||** とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞(祈禱文)が持つ言葉の自然なリズムに則つて歌うことを意味しています。ただ早く歌つてしまつたり、棒読みになつてしまつたりしないよう、氣をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。



【 早課 (晩堂課から続けて行う時は4ページの【 六段聖詠 】から)】

司祭) われら かみ つね あが ほ いま いつ よよ  
我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世に。



アミン。

誦經) われら かみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き  
我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

てん おう なぐさ もの しんじつ しん あ ところ もの み ところ もの ばんぜん  
天の王、慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、満たざる所なき者よ、萬善

ほうぞう もの せいめい たも しゅ きた われら うち お われら もるもろ けがれ  
の寶蔵なる者、生命を賜うの主よ、來りて我等の中に居り、我等を諸の穢より

いさぎよ しぜんしゃ われら たましい すく たま  
潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救い給え。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち ゆる  
至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を赦

せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ  
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

てん いま われら ちち ねが なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん  
天に在す我等の父よ、願わくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天

おこな ごと ち おこな わ にちよう かけて こんにちわれら あた たま われら おいめ  
に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に債

もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なおわれら  
ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我等を

きょうあく すく たま  
凶 悪より救い給え。

司祭) けだしくに けんのう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋 國と權能と光榮は爾 父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。



誦經) しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ  
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

きた われら おう かみ こうはい  
來れ、我等の王・神に叩拜せん、

きた われら おう かみ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王・神に叩拜俯伏せん、

きた われら おう かみ まえ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩拜俯伏せん、

## 【 第19聖詠 】

誦經) ねが しゅ うれい ひ おい なんぢ き かみ な なんぢ ふせ まも ねが  
願わくは主は憂の日に於て爾に聴き、イアコフの神の名は爾を扨ぎ衛らん。願わ

くはせいしょ たすけ なんぢ つかわ なんぢ かた ねが なんぢ ことごと  
くは聖所より助を爾に遣し、シオンより爾を固めん。願わくは爾が悉くの

ささげもの きおく なんぢ やきまつり こ もの ねが しゅ なんぢ ころろ したが  
獻物を記憶し、爾の燔祭を肥えたる物とせん。願わくは主は爾の心に循いて

なんぢ あた なんぢ はか ところ ことごと と われら なんぢ すくい よろこ わ かみ な  
爾に與え、爾の謀る所を悉く遂げしめん。我等は爾の救を喜び、我が神の名

よ はた あ ねが しゅ なんぢ ことごと ねがい じょうじゅ いまわれしゅ その  
に依りて旌を揚げん。願わくは主は爾が悉くの願を成就せしめん。今我主が其

あぶら もの すく し かれ せいてん そのすくい みぎ て ちから もつ これ こた  
け膏つられし者を救うを知れり、彼は聖天より其救の右の手の力を以て之に對う。

あるい くるま もつ あるい うま もつ ほこ もの ただわれら しゅわ かみ な もつ ほこ かれ  
或は車を以て、或は馬を以て誇る者あり、唯我等は主我が神の名を以て誇る、彼

ら うご たお ただわれら お なお た しゅ おう すく またわれら なんぢ よ とき  
等は動きて顛れ、唯我等は起きて直く立つ。主よ、王を救え、又我等が爾に呼ばん時、

われら き たま  
我等に聴き給え。

## 【 第20聖詠 】

しゅ おう なんぢ ちから たのし なんぢ すくい よろこ きわま そのころろ のぞ ところ  
主よ、王は爾の力を樂み、爾の救を歡ぶこと極りなし。其心に望む所

なんぢこれ あた そのくち もと ところ なんぢこれ いな けだしなんぢ じんじ しゆくふく  
は、爾之を與え、其口に求むる所は、爾之を辭まざりき。蓋爾は仁慈の祝福

もつ かれ むか じゅんきん かんむり そのこうべ こうむ かれいのち なんぢ もと なんぢ  
を以て彼を迓え、純金の冠を其首に冠らせたり。彼生命を爾に求めしに、爾

これ よよ ことぶき たま かれ さかえ なんぢ すくい もつ おおい なんぢ せんえい いげん  
之に世世の壽を賜えり。彼の榮は爾の救を以て大なり、爾は尊榮と威嚴と

これ こうむ なんぢ しゆくふく よよ たま なんぢ かんぼせ よろこび かれ たのし  
を之に被らせたり。爾は祝福を世に賜い、爾が顔の歡にて彼を樂ませ

けだしおう しゆ たの しじょうしや じんじ よ うご なんぢ て なんぢ ことごと  
たり。蓋王は主を頼み、至上者の仁慈に因りて動かざらん。爾の手は爾が悉く

てき たづ いた なんぢ みぎ て およ なんぢ にく もの たづ いた なんぢいか としかれら  
の敵を尋ね出し、爾の右の手は凡そ爾を憎む者を尋ね出さん。爾怒る時彼等を

かる ごと しゆ そのいかり おい かれら ほろぼ ひ かれら か なんぢ かれら み  
火爐の如くなさん、主は其怒に於て彼等を滅し、火は彼等を齧まん。爾は彼等の果を

ち た かれら たね ひと こうち た けだしかれら なんぢ むか あくじ くわだ  
地より絶ち、彼等の種を人の子の中より絶たん、蓋彼等は爾に向いて悪事を企て、

はかりごと もう これ と あた なんぢかれら た まと なんぢ ゆみ  
謀を設けたれども、之を遂ぐる事能わざりき。爾彼等を立てて的となし、爾の弓

もつ や そのおもて はな しゆ なんぢ ちから もつ みづか あが われら なんぢ けんろう  
を以て矢を其面に發たん。主よ、爾の力を以て自ら擧れ、我等は爾の權能を

かしょうさんえい  
歌頌讚榮せん。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

しゆ なんぢ たみ すく なんぢ しぎょう ふく くだ なんぢ じゅうじか なんぢ すまい まも  
主よ、爾の民を救い、爾の嗣業に福を降せ、爾の十字架にて爾の住所を護り

たま  
給え。

こうえい ちち こ せいしん き  
光榮は父と子と聖神に歸す、

あま じゅうじか あ かみ なんぢ どうめい あらた すまい なんぢ めぐみ  
甘んじて十字架に擧げられしハリストス神よ、爾が同名の新なる住所に爾の恵

た たま なんぢ ちから もつ これ たのし そのしよてき か たま これなんぢ わへい  
を垂れ給え、爾の力を以て此を樂ませ、其諸敵に勝たしめ給え、此爾が和平の

ぶき か かつ もつ そのたすけ  
武器、勝たれぬ勝を以て其助とすればなり。

いま いつ よよ  
今も何時も世に、アミン。

いげん はぢ え てんたつ しぜん さんえい しょうしんぢよ われら きとう  
威嚴にして耻を得しめざる轉達、至善にして讚詠せらるる生神女よ、我等の祈禱を

しりぞ せいきょう ひと すまい かつ てん しょうり あた たま ひとりおんちよう み  
斥けず、正教の人の住所を固め、天より勝利を與え給え、獨恩寵に満たさるる

もの なんぢ かみ う  
者よ、爾は神を生みたればなり。

## 【 重聯禱 】

司祭) 神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、



しゆあわれめ、しゆあわれめ、しゆあわれめよ。  
主憐 主憐 主憐

司祭) 又吾が國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またきょうかい</sup>又 <sup>つかさど</sup>教 會 <sup>そんき</sup>を <sup>われら</sup>司 <sup>ぜんにつぼん</sup>る <sup>ふしゅきょう</sup>尊 貴 <sup>そんき</sup>なる <sup>われら</sup>我 等 <sup>せんだい</sup>の <sup>せんたい</sup>全 日 本 <sup>せんたい</sup>の <sup>せんたい</sup>府 主 教 <sup>せんたい</sup>ダニイル、<sup>せんたい</sup>尊 貴 <sup>せんたい</sup>なる <sup>せんたい</sup>我 等 <sup>せんたい</sup>の <sup>せんたい</sup>仙 台

<sup>だいしゅきょう</sup>の <sup>だいしゅきょう</sup>大 主 教 <sup>だいしゅきょう</sup>セラフィムの <sup>ため</sup>爲 <sup>いの</sup>に 禱 <sup>いの</sup>る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またしゅうけいていおよ</sup>又 <sup>しゅう</sup>衆 兄 弟 <sup>しゅう</sup>及 び <sup>しゅう</sup>衆 <sup>ため</sup>ハリスティアニンの <sup>いの</sup>爲 <sup>いの</sup>に 禱 <sup>いの</sup>る、



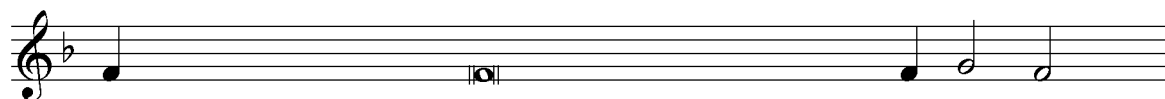
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>けだしなんぢ</sup>蓋 <sup>じんじ</sup>爾 <sup>ひと</sup>は <sup>あい</sup>仁 慈 <sup>かみ</sup>に して <sup>われら</sup>人 <sup>なんぢちち</sup>を <sup>こ</sup>愛 <sup>せいしん</sup>す <sup>けん</sup>る <sup>いま</sup>神 乃 <sup>いま</sup>、<sup>いま</sup>我 等 <sup>いま</sup>光 榮 <sup>いま</sup>を <sup>いま</sup>爾 <sup>いま</sup>父 <sup>いま</sup>と <sup>いま</sup>子 <sup>いま</sup>と <sup>いま</sup>聖 神 <sup>いま</sup>に <sup>いま</sup>獻 <sup>いま</sup>ず、<sup>いま</sup>今 也

<sup>いつ</sup>いつ <sup>よよ</sup>時 也 <sup>よよ</sup>も <sup>よよ</sup>世 世 <sup>よよ</sup>に、



ア ミ ン。



しんぷよ、しゅのなをもつてふくをくだせ。  
神 父 主 名 以 福 降

司祭) <sup>こうえい</sup>光 榮 <sup>いつせい</sup>は <sup>いのち</sup>一 性 <sup>いのち</sup>に して <sup>いのち</sup>生 命 <sup>いのち</sup>を <sup>いのち</sup>施 <sup>いのち</sup>す <sup>いのち</sup>分 <sup>いのち</sup>れ <sup>いのち</sup>ざ <sup>いのち</sup>る <sup>いのち</sup>聖 <sup>いのち</sup>三 <sup>いのち</sup>者 <sup>いのち</sup>に <sup>いのち</sup>歸 <sup>いのち</sup>す、<sup>いのち</sup>今 也 <sup>いのち</sup>も <sup>いのち</sup>いつ <sup>いのち</sup>時 也 <sup>いのち</sup>も <sup>いのち</sup>世 世 <sup>いのち</sup>に、



ア ミ ン。

【 六段聖詠 】 (晩堂課から続く時、ここから始める)

誦經) <sup>いとたかき</sup>至 <sup>こうえいかみ</sup>高 <sup>き</sup>に 是 <sup>ち</sup>光 榮 <sup>ち</sup>神 <sup>ち</sup>に <sup>ち</sup>歸 <sup>ち</sup>し、<sup>ち</sup>地 <sup>ち</sup>に 是 <sup>ち</sup>平 安 <sup>ち</sup>降 <sup>ち</sup>り、<sup>ち</sup>人 <sup>ち</sup>に <sup>ち</sup>恵 <sup>ち</sup>は <sup>ち</sup>臨 <sup>ち</sup>め <sup>ち</sup>り。

至 <sup>いとたかき</sup>高 <sup>こうえいかみ</sup>に 是 <sup>き</sup>光 榮 <sup>き</sup>神 <sup>き</sup>に <sup>き</sup>歸 <sup>き</sup>し、<sup>き</sup>地 <sup>き</sup>に 是 <sup>き</sup>平 安 <sup>き</sup>降 <sup>き</sup>り、<sup>き</sup>人 <sup>き</sup>に <sup>き</sup>恵 <sup>き</sup>は <sup>き</sup>臨 <sup>き</sup>め <sup>き</sup>り。

至 <sup>いとたかき</sup>高 <sup>こうえいかみ</sup>に 是 <sup>き</sup>光 榮 <sup>き</sup>神 <sup>き</sup>に <sup>き</sup>歸 <sup>き</sup>し、<sup>き</sup>地 <sup>き</sup>に 是 <sup>き</sup>平 安 <sup>き</sup>降 <sup>き</sup>り、<sup>き</sup>人 <sup>き</sup>に <sup>き</sup>恵 <sup>き</sup>は <sup>き</sup>臨 <sup>き</sup>め <sup>き</sup>り。

しゅ わ くちびる ひら しか わ くち なんぢ さんび あ  
主 也、我 が 唇 <sup>あ</sup>を <sup>あ</sup>啓 <sup>あ</sup>け <sup>あ</sup>よ、<sup>あ</sup>然 <sup>あ</sup>せ <sup>あ</sup>ば <sup>あ</sup>我 <sup>あ</sup>が <sup>あ</sup>口 <sup>あ</sup>は <sup>あ</sup>爾 <sup>あ</sup>の <sup>あ</sup>讚 <sup>あ</sup>美 <sup>あ</sup>を <sup>あ</sup>揚 <sup>あ</sup>げ <sup>あ</sup>んと <sup>あ</sup>す。

しゅ わ くちびる ひら しか わ くち なんぢ さんび あ  
主よ、我が唇を啓けよ、然せば我が口は爾の讚美を揚げんとす。

【 第3聖詠 】

しゅ わ てき なん おお おお もの われ せ おお もの わ たましい さ かれ  
主よ、我が敵は何ぞ多き、多くの者は我を攻む、多くの者は我が靈を指して、彼は  
かみ すくい え い しか しゅ なんぢ われ まも たて われ さかえ なんぢ  
神より救を得ずと云う。然れども主よ、爾は我を衛る盾なり、私の榮なり、爾は  
わ こうべ あ わ こえ もつ しゅ よ しゅ そのせいざん われ き たま われふ い  
我が首を擧ぐ、我が聲を以て主に呼ぶに、主は其聖山より我に聴き給う。我臥し、寝ね、  
またさ しゅ われ ふせ まも めぐ われ せ ばんみん われこれ おそ しゅ  
又覺む、主は我を扞ぎ衛ればなり。環りて我を攻むる萬民は、我之を懼れざらん。主  
よ、起きよ、吾が神よ、我を救い給え。蓋爾は我が諸敵の頬を批ち、悪人の齒を折  
すくい しゅ よ なんぢ こうふく なんぢ たみ あ  
けり。救は主に依る、爾の降福は爾の民に在り。

【 第37聖詠 】

しゅ なんぢ いきどおり もつ われ せ なか なんぢ いかり もつ われ ばつ なか けだし  
主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ、蓋  
なんぢ や われ き なんぢ て おも われ くわ なんぢ いかり よ わ にく いた  
爾の矢は我に刺さり、爾の手は重く我に加わる。爾の怒に依りて我が肉に傷まざ  
ところ われ つみ よ わ ほね やす え けだしわ ふほう わ こうべ あふ おもに  
る所なく、私の罪に因りて我が骨は安きを得ず、蓋我が不法は我が首に溢れ、重任の  
ごと われ あつ われ むち よ わ きずくさ かつくさ われかが たお しゅうじつうれ  
如く我を圧す、私の無智に依り我が傷腐れて且臭し。我屈まりて仆れんとし、終日憂  
ゆ けだしわ こし ねつ なや わ にく いた ところ われちからおとろ いた  
いて行く、蓋我が腰は熱に悩まされ、我が肉に傷まざる所なし。我力衰えて痛く  
つか わ ころ さ さげ しゅ わ ことごと ねがい なんぢ まえ あ わ なげき  
憊れ、我が心の裂くるによりて號ぶ。主よ、我が悉くの願は爾の前に在り、我が歎息  
なんぢ かく わ ころ ふる おのの わ ちから われ ぬ わ め ひかり すで われ  
は爾に隠るるなし。我が心は戦い栗き、我が力は我より脱け、我が目の光も已に我  
わ とも した もの わ きず み はな わ しんせき とお た わ  
にあるなし。我が朋と親しき者とは我が傷を見て離れ、我が親戚は遠ざかりて立つ。我が  
いのち もと もの あみ もう われ そこな ほつ もの わ ほろび い まいにちあ  
生命を覓むる者は網を設け、我を害わんと欲する者は我が淪亡のことを言いて、毎日憂  
はかりごと たく しか われ みみしい ごと き おし ごと おのれ くち ひら ここ  
しき謀を圖む、然れども我は聾の如く聴かず、啞の如く己の口を啓かず、是  
おい われ き そのくち こた ところ ひと ごと けだししゅ われなんぢ たの  
に於いて我は聞かなく、其口に答うる所なき人の如くなれり、蓋主よ、我爾を恃  
しゅわ かみ なんぢき たま われい ねが てき われ か わ あし つまぶ  
む、主我が神よ、爾聴き給わん。我言えり、願わくは敵は我に勝たざらん、我が足の踏  
とき かれら われ むか ほこ たか われほとん たお われ うれい つね わ まえ あ  
く時、彼等は我に向いて誇り高ぶる。我殆ど仆れんとす、私の憂は常に我が前に在  
われ わ ふほう みと わ つみ ため はなはだかなし わ てき い いよいよつよ ゆえり  
り。我は我が不法を認め、我が罪の爲に甚哀む。我が敵は生きて愈強く、故な  
われ にく もの ますますおお あく もつ われ ぜん むく もの わ ぜん したが よ  
くして我を疾む者は益多し、悪を以て私の善に報ゆる者は、我が善に従うに因り

われ てき しゅわ かみ われ す なか われ とお なか しゅわれ きゅうしゅ  
て我の敵となれり。主我が神よ、我を遣つる母れ、我に遠ざかる母れ、主我の救主よ、  
すみやか きた われ すく たま  
速に來りて我を救い給え。

【 第62聖詠 】

かみ なんぢ われ かみ われあかつき なんぢ たづ わ たましい かわ なんぢ のぞ わ  
神よ、爾は我の神なり。我 暁より爾を尋ぬ、我が靈は渴きて爾を望み、我  
み むな かわ みづ ち いた なんぢ した なんぢ ちから なんぢ こうえい  
が身は空しくして燥ける水なき地にありて、痛く爾を慕う、爾の能力と爾の光榮と  
み ため わ かつ なんぢ せいしょ み ごと けだしなんぢ あわれみ いのち まさ わ くち  
を見ん爲なり、我が曾て爾を聖所に觀しが如し、蓋爾の愛憐は生命に愈る。我が口  
なんぢ さんび か ごと われい ときなんぢ あが ほ なんぢ な よ わ て あ  
爾を讚美せん。是くの如く我生ける時爾を崇め讚め、爾の名に依りて我が手を擧げん。  
わ たましい あ あぶら もつ ごと わ くちよろこび こえ なんぢ さんび ところ  
我が靈の飽かさること脂油を以てするが如く、我が口飲の聲にて爾を讚美す、榻  
なんぢ きおく やこう なんぢ おも とき あ けだしなんぢ われ たすけ なんぢ つばさ かげ  
にて爾を記憶し、夜更に爾を思う時に在り。蓋爾は我の扶助なり、爾が翼の蔭  
おい われよろこ わ たましい した なんぢ つ なんぢ みぎ て われ たす か わ  
に於て我欣ばん、我が靈は親しく爾に付き、爾の右の手は我を扶く。彼の我が  
たましい そこな はか もの ち ふか ところ くだ かれらやいば かか きつね えもの  
靈を害わんことを謀る者は地の深き處に降らん、彼等刃に攫りて、狐の獲物と  
ただおう かみ ため たのし およ かれ もつ ちか もの ほまれ え けだしいつわり い  
ならん。惟王は神の爲に樂まん、凡そ彼を以て誓う者は譽を得ん、蓋謊を言う  
もの くち ふさ  
者の口は塞がれんとす。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

かみ こうえい なんぢ き  
ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は爾に歸す。

かみ こうえい なんぢ き  
ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は爾に歸す。

かみ こうえい なんぢ き  
ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は爾に歸す。

(後三段は省略)

【 大聯禱 】

われらあんわ しゅ いの  
司祭) 我等安和にして主に禱らん、



うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの  
司祭) 上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>ぜんせかい あんわ かみ せい しよきょうかい けんりつ およ しゅうじん ごういつ ため しゅ いの</sup>全世界の安和、神の聖なる諸 教會の堅立、及び衆 人の合一の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ こころ もつ ここ きた もの ため しゅ いの</sup>此の聖堂、及び信と 慎 と神を畏るる心 とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>きょうかい つかさど そんき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう そんき われら せんだい だい</sup>教會を 司 る尊貴なる我等の全日本の府主教ダニイル、尊貴なる我等の仙台の大

<sup>しゅきょう しさい そんびん よ ほさいしよく ことごと きょうしゅう およ</sup>主教セラフィム、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び

<sup>しゅうじん ため しゅ いの</sup>衆人の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>わがくに てんのう およ くに つかさど もの ため しゅ いの</sup>我國の天皇、及び國を 司 る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>こ まち およそ まち ちほう ため およ しん もつ こうち お もの ため しゅ いの</sup>此の都邑と 凡 の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>きこうじゅんわ ごこくほうじょう てんかたいへい ため しゅ いの</sup>氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>こうかい もの りょこう もの やまい うれ もの かんなん あ もの とりこ もの およ</sup>航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び

<sup>かれら すくい ため しゅ いの</sup>彼等の救の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬが ため しゅ いの  
我等 諸 の憂愁と忿怒と危難とを 免 るるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
神よ、 爾 の恩 寵を以て、我等を助け救い 憐 み 護れよ、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ  
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、  
しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら  
諸 聖人を記憶して、我等己の身及び互に 各の身を以て、並に 悉くの我等の  
いのち もつ かみ いたく  
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ な んぢ に 。  
主 爾

司祭) けだしおよ こうえいそんきふくはい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋 凡そ光榮尊貴伏拝は 爾 父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



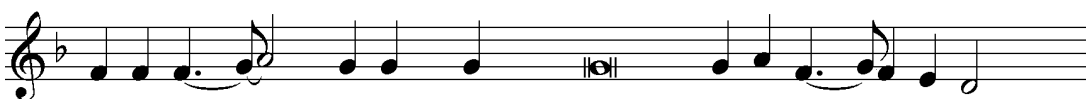
ア ミ ン。

司祭) われやちゆうわ たましい なんぢ した あした わ ちゆうしん なんぢ たづ  
我夜中我が 靈 にて 爾 を慕えり、 晨 より我が 中 心にて 爾 を尋ねん。



ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ 。

司祭) なんぢ しんばん ち おこな とき よ お もの ぎ まな  
爾 の審判が地に行わるる時、世に居る者は義を學ぶ。




ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ 。

司祭) ひ なんぢ てき か  
火は 爾 の敵を嚙まん。






 せ い、 せ い、 せいなるかなわがか みよ、  
 聖 い、 聖 い、 聖 哉 吾 神


 なんちがむけいのぐんのでんたつによりてわれらをあわれみたまえ。  
 爾 無形 軍 轉達 因 我 等 憐 給 え。

誦經) こうえい ちち こ せいしん き  
 光 榮は父と子と聖神に歸す、

※その週の調により替える。 ※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

第1調) われらしゅうてんぐん とも いたか お もの せいさん さんび たてまつ ごと  
 我等衆天軍と偕に最高きに居る者に聖三の讚美を奉りて、ヘルヴィムの如く  
 よ  
 呼ばん、

第2調) つく せい ばんゆう ぞうせいしゅ われら くち ひら たま わ なんち さんび つた  
 造られざる性、萬有の造成主よ、我等の口を開き給え、我が爾の讚美を伝えて  
 よ ため  
 呼ばん爲なり、

第3調) むげん ちち どうむげん こ どうえいざい しん ゆいいち しんせい われら ごと ゆうかん  
 無原の父、同無原の子、同永在の神たる唯一の神性を我等ヘルヴィムの如く勇敢  
 もつ さんえい い  
 を以て讚榮して曰う、

第4調) しぜんしゃ てんし ひんい てん お ごと われらひと はんれつ ち おい いまおそれ もつ  
 至善者よ、天使の品位が天に於ける如く、我等人の班列は地に於て今畏を以て  
 かちうた なんち たてまつ  
 凱歌を爾に奉る、

第5調) むげん さんしゃ われらいさみ もつ なんち むけい ぐん かたど ふう くち よ  
 無原なる三者よ、我等勇敢を以て爾の無形の軍を象りて、不當なる口にて呼ぶ、

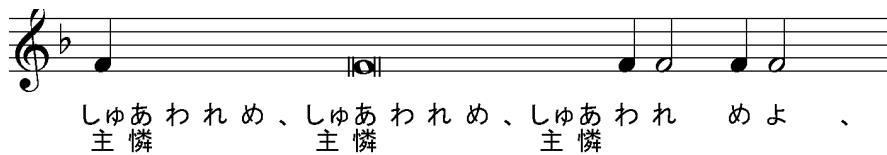
第6調) わ かみ りくよく もの むけい くち もだ さんしょう もつ なんち せいさん うた よ われ  
 我が神よ、六翼の者は無形の口、黙さざる讚頌を以て爾に聖三の歌を呼ぶ、我  
 らちじょう もの ふう くち もつ なんち さんび たてまつ  
 等地上の者も不當なる口を以て爾に讚美を奉る、

第7調) たましい ねむり ごと おこたり しりぞ しんぼんしゃ さんび はげ おそれ もつ よ  
 靈よ眠の如く怠惰を退け、審判者を讚美せんことを勵みて、畏を以て呼べ、

第8調) ら あえ なんち あお み めぐ と しんせい せいさん うた たてまつ  
 ヘルヴィム等は敢て爾を仰ぎ視ずして、環り飛びて、神聖なる聖三の歌を奉る、



して、<sup>しよてんし</sup>諸<sup>とも</sup>天使<sup>なんぢ</sup>と<sup>うた</sup>偕<sup>たてまつ</sup>に<sup>爾</sup>爾に<sup>歌</sup>歌を<sup>奉</sup>奉る、



誦經) <sup>いま</sup>今も<sup>いつ</sup>何時も<sup>よよ</sup>世々に、アミン。

【 第24聖詠 ダヴィドの詠。 】

しゅ なんぢ わ たましい あ わ かみ なんぢ たの われ よよはぢ わ てき  
主よ、爾に我が靈を擧ぐ。吾が神よ、爾を恃む、我に世々愧なからしめよ、我が敵

われ か よろこ なか およ なんぢ たの もの はぢ たま みだり ほう おか  
を我に勝ちて喜ばしむる母れ。凡そ爾を恃む者にも愧なからしめ給え、妄に法を犯

もの ねが はぢ え しゅ われ なんぢ みち しめ われ なんぢ みち おし われ なんぢ  
す者は願わくは愧を得ん。主よ、我に爾の道を示し、我に爾の道を訓えよ。我を爾

しんり みちび われ おし たま けだしなんぢ わ すくい かみ われひび なんぢ たの  
の真理に導きて、我を訓え給え、蓋爾は我が救の神なり、我日に爾を恃めり。

しゅ なんぢ めぐみ なんぢ あわれみ きおく けだしこ えいえん わ わか とき  
主よ、爾の鴻恩と爾の慈憐とを記憶せよ、蓋是れ永遠よりあるなり。我が少き時の

つみ あやまち きおく なか しゅ なんぢ いつくしみ よ なんぢ あわれみ もつ われ きおく  
罪と過とを記憶する母れ、主よ、爾の仁慈に依り、爾の慈憐を以て、我を記憶

しゅ じん ぎ ゆえ ざいにん みち おし しめ けんそん もの ぎ みちび けんそん  
せよ。主は仁なり、義なり、故に罪人に道を訓え示す、謙遜の者を義に導き、謙遜

もの おのれ みち おし およ しゅ みち そのやく そのけいし まも もの あ じれん  
の者に己の道を教う。凡そ主の道は其約と其啓示とを守る者に在りて慈憐なり、

しんじつ しゅ なんぢ な よ わ つみ ゆる たま そのおおい もつ だれ しゅ  
眞實なり。主よ爾の名に因りて我が罪を赦し給え、其大なるを以てなり。誰か主を

おそ ひと しゅ これ えら みち しめ かれ たましい ふく お かれ すえ ち つ  
畏るる人たる、主は之に擇ぶべき道を示さん。彼の靈は福に居り、彼の裔は地を嗣

しゅ おうぎ かれ おそ もの ぞく かれ そのやく もつ これ あらわ わ めつね しゅ  
がん。主の奥義は彼を畏るる者に屬し、彼は其約を以て之に顯す。我が目常に主を

あお そのわ あし あみ いだ よ われ かえり われ あわれ われひとり くるし  
仰ぐ、其我が足を網より出すに因る。我を顧み、我を憐め、我獨にして苦めら

るに<sup>よ</sup>因る。我<sup>わ</sup>が心<sup>こころ</sup>の憂<sup>うれ</sup>い益<sup>ます</sup>多し、我<sup>わ</sup>が苦難<sup>くなん</sup>より我<sup>われ</sup>を引き出せ、我<sup>わ</sup>が困<sup>ひ</sup>苦、我<sup>わ</sup>が勞<sup>いだ</sup>瘁<sup>わ</sup>、我<sup>わ</sup>が勞<sup>くる</sup>瘁<sup>しみ</sup>、我<sup>わ</sup>が勞<sup>つか</sup>瘁<sup>れ</sup>

を<sup>か</sup>願<sup>えり</sup>み、我<sup>わ</sup>が諸<sup>もろ</sup>の罪<sup>つみ</sup>を赦<sup>ゆる</sup>し給<sup>たま</sup>え。我<sup>わ</sup>が敵<sup>た</sup>を觀<sup>て</sup>よ、何<sup>み</sup>ぞ多<sup>なん</sup>き、彼<sup>お</sup>等<sup>お</sup>が我<sup>われ</sup>を怨<sup>う</sup>む恨<sup>う</sup>は

何<sup>なん</sup>ぞ甚<sup>は</sup>しき。我<sup>わ</sup>が靈<sup>たま</sup>を護<sup>まも</sup>りて我<sup>われ</sup>を救<sup>すく</sup>い、我<sup>わ</sup>が爾<sup>なんぢ</sup>に於<sup>お</sup>ける恃<sup>た</sup>に愧<sup>のみ</sup>なからしめ給<sup>は</sup>え。

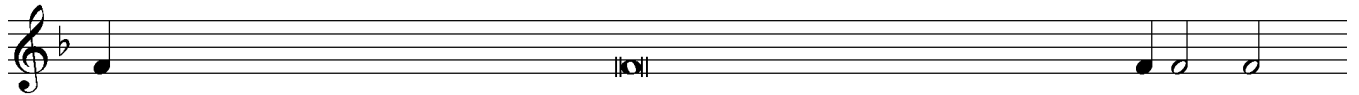
願<sup>ね</sup>わくは無<sup>む</sup>玷<sup>てん</sup>と義<sup>ぎ</sup>とは我<sup>われ</sup>を護<sup>まも</sup>らん、我<sup>われ</sup>爾<sup>なんぢ</sup>を恃<sup>た</sup>めばなり。神<sup>かみ</sup>よ、イ<sup>い</sup>ズ<sup>い</sup>ラ<sup>り</sup>イ<sup>り</sup>を其<sup>その</sup>諸<sup>もろ</sup>の

憂<sup>うれ</sup>いより救<sup>すく</sup>い給<sup>たま</sup>え。

光<sup>こう</sup>榮<sup>えい</sup>は父<sup>ちち</sup>と子<sup>こ</sup>と聖<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>に歸<sup>き</sup>す、



い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>も<sup>も</sup>よ<sup>よ</sup>よ<sup>よ</sup>に<sup>に</sup>、ア<sup>ア</sup>ミ<sup>ミ</sup>ン<sup>ン</sup>。



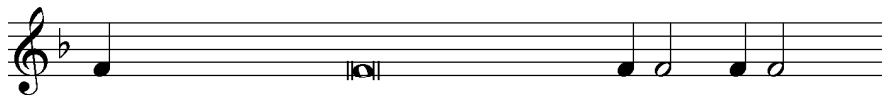
ア<sup>ア</sup>リ<sup>リ</sup>ル<sup>ル</sup>イ<sup>イ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>、ア<sup>ア</sup>リ<sup>リ</sup>ル<sup>ル</sup>イ<sup>イ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>、ア<sup>ア</sup>リ<sup>リ</sup>ル<sup>ル</sup>イ<sup>イ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>、か<sup>か</sup>み<sup>み</sup>よ<sup>よ</sup>、こ<sup>こ</sup>う<sup>う</sup>え<sup>え</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>なん<sup>なん</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>に<sup>に</sup>き<sup>き</sup>す<sup>す</sup>。



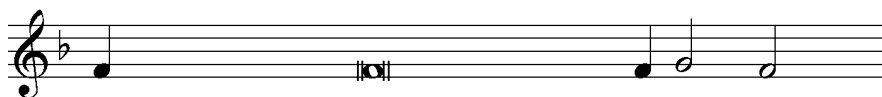
ア<sup>ア</sup>リ<sup>リ</sup>ル<sup>ル</sup>イ<sup>イ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>、ア<sup>ア</sup>リ<sup>リ</sup>ル<sup>ル</sup>イ<sup>イ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>、ア<sup>ア</sup>リ<sup>リ</sup>ル<sup>ル</sup>イ<sup>イ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>、か<sup>か</sup>み<sup>み</sup>よ<sup>よ</sup>、こ<sup>こ</sup>う<sup>う</sup>え<sup>え</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>なん<sup>なん</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>に<sup>に</sup>き<sup>き</sup>す<sup>す</sup>。



ア<sup>ア</sup>リ<sup>リ</sup>ル<sup>ル</sup>イ<sup>イ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>、ア<sup>ア</sup>リ<sup>リ</sup>ル<sup>ル</sup>イ<sup>イ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>、ア<sup>ア</sup>リ<sup>リ</sup>ル<sup>ル</sup>イ<sup>イ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>、か<sup>か</sup>み<sup>み</sup>よ<sup>よ</sup>、こ<sup>こ</sup>う<sup>う</sup>え<sup>え</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>なん<sup>なん</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>に<sup>に</sup>き<sup>き</sup>す<sup>す</sup>。



し<sup>し</sup>ゅ<sup>ゅ</sup>あ<sup>あ</sup>われ<sup>れ</sup>め<sup>め</sup>、し<sup>し</sup>ゅ<sup>ゅ</sup>あ<sup>あ</sup>われ<sup>れ</sup>め<sup>め</sup>、し<sup>し</sup>ゅ<sup>ゅ</sup>あ<sup>あ</sup>われ<sup>れ</sup>め<sup>め</sup>よ<sup>よ</sup>、



こ<sup>こ</sup>う<sup>う</sup>え<sup>え</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>ち<sup>ち</sup>ち<sup>ち</sup>と<sup>と</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>せ<sup>せい</sup>い<sup>い</sup>し<sup>しん</sup>に<sup>に</sup>き<sup>き</sup>す<sup>す</sup>。

誦<sup>い</sup>經<sup>ま</sup>) 今<sup>い</sup>も<sup>ま</sup>何<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>も<sup>も</sup>世<sup>よ</sup>世<sup>よ</sup>に<sup>に</sup>、ア<sup>ア</sup>ミ<sup>ミ</sup>ン<sup>ン</sup>。

### 【 第 27 聖 詠 】

主<sup>しゅ</sup>よ、我<sup>われ</sup>爾<sup>なんぢ</sup>に呼<sup>よ</sup>ぶ、我<sup>われ</sup>の防<sup>か</sup>固<sup>た</sup>め、我<sup>わ</sup>が爲<sup>た</sup>めに黙<sup>も</sup>す母<sup>も</sup>れ、恐<sup>お</sup>らくは爾<sup>なんぢ</sup>黙<sup>も</sup>さば、我<sup>われ</sup>は墓<sup>はか</sup>

に<sup>くだ</sup>下<sup>もの</sup>る者<sup>ごと</sup>の如<sup>わ</sup>くならん。我<sup>わ</sup>が爾<sup>なんぢ</sup>に呼<sup>よ</sup>び、我<sup>わ</sup>が手<sup>て</sup>を舉<sup>あ</sup>げて爾<sup>なんぢ</sup>の聖<sup>せい</sup>殿<sup>でん</sup>に向<sup>む</sup>かう時<sup>とき</sup>、我<sup>わ</sup>が禱<sup>いのり</sup>の

こ<sup>こ</sup>え<sup>え</sup>き<sup>き</sup>い<sup>い</sup>たま<sup>たま</sup>われ<sup>われ</sup>あく<sup>あく</sup>し<sup>し</sup>や<sup>や</sup>お<sup>お</sup>よ<sup>よ</sup>ふ<sup>ふ</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>お<sup>お</sup>こ<sup>こ</sup>な<sup>な</sup>もの<sup>もの</sup>す<sup>す</sup>な<sup>な</sup>わ<sup>わ</sup>ち<sup>ち</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>なり<sup>なり</sup>わ<sup>わ</sup>へ<sup>へ</sup>い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>た<sup>た</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ

に<sup>あく</sup>悪<sup>い</sup>を<sup>だ</sup>懐<sup>もの</sup>く者<sup>とも</sup>と偕<sup>ほ</sup>ろ<sup>ぼ</sup>す母<sup>な</sup>れ。彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>の所<sup>し</sup>爲<sup>わざ</sup>、彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>の悪<sup>あ</sup>しき<sup>お</sup>こ<sup>こ</sup>ない<sup>ない</sup>し<sup>し</sup>た<sup>た</sup>が<sup>が</sup>こ<sup>こ</sup>れ<sup>れ</sup>む<sup>む</sup>く

かれら て な ところ したが これ むく かれら う ところ もつ これ あた かれら  
 彼等の手の作す所に 循いて之に報い、彼等の受くべき所を以て之に與えよ。彼等は  
 しゅ おこな ところ しゅ て な ところ かえり しゅ かれら やぶ かれら た  
 主の行ふ所と、主の手の作す所とを顧みざるによりて、主は彼等を敗り、彼等を建  
 てざらん。主は崇め讃めらる。彼既に我が禱の聲を聆き納れたればなり。主は我が力、  
 わ たて わ ころかた たの かれわれ たす わ ころ よろこ われうた もつ  
 我が盾なり、我が心彼を頼みしに、彼我を佑けたり、我が心は歡べり、我歌を以て  
 かれ ほ あ しゅ そのたみ ちから その あぶら もの すくい まもり なんぢ たみ  
 彼を讃め揚げん。主は其民の力なり、其の膏つけられし者の救の衛なり。爾の民  
 すく なんぢ ぎょう ふく くだ これ ぼく これ よよ あ たま  
 を救い、爾の業に福を降し、之を牧し、之を世に舉げ給え。

こうえい ちち こ せいしん き  
 光榮は父と子と聖神に歸す、



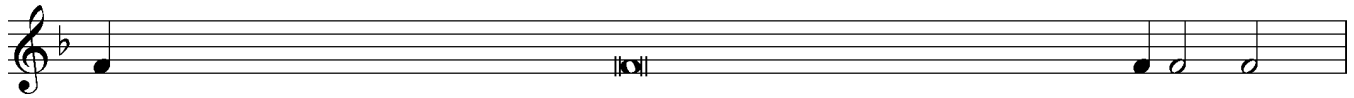
いま いつも よよ に、アミン。  
 今 何時 世に、アミン。



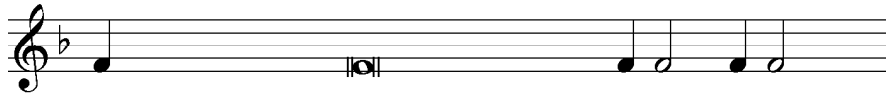
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみよ、こうえいはなんぢにきす。  
 神 光 榮 爾 歸



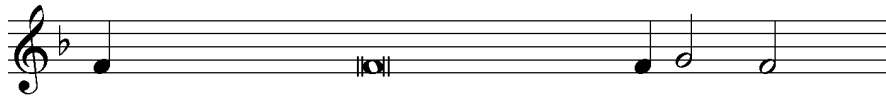
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみよ、こうえいはなんぢにきす。  
 神 光 榮 爾 歸



アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみよ、こうえいはなんぢにきす。  
 神 光 榮 爾 歸



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ、  
 主 憐 主 憐 主 憐



こうえいはちちとことせいしんにきす。  
 光 榮 は 父 と 子 聖 神 歸

誦經) いま いつ よよ  
 今も何時も世に、アミン。

【 第31聖詠 ダヴィドの詠。教訓。 】

ふほう ゆる つみ おお ひと さいわい しゅ つみ き しん いつわり ひと  
 不法を赦され、罪を蔽われたる人は 福なり。主が罪を歸せず、その神に 偽なき人  
 さいわい われもだ とき わ しゅうじつ さまよい よ わ ほねふる けだしなんぢ て  
 は 福なり。我黙しし時、我が終日の呻吟に因りて、我が骨古びたり、蓋爾の手

ちゅうやおも われ くわ わ うるおい き なつ ひでり お ごと しか われわ  
は 昼 夜 重く 我に加わり、我が潤 沢の消えしこと夏の 早 に於けるが如し。然れども我我

つみ なんぢ あらわ わ ふほう かく われい わ つみ しゅ つうこく なんぢすなわ  
が罪を 爾 に 顯 し、我が不法を 隠さざりき、我謂えり、我が罪を主に 痛告すと、爾 乃

わ つみ とが われ のぞ これ よ もろもろ ぎじん べんぎ とき お なんぢ いの  
ち我が罪の咎を我より除けり。此に縁りて 諸 の義人は便宜の時に於いて 爾 に 禱らん、

そのときおおみづ あふれ かれ およ なんぢ われ おおい なんぢ われ うれい まも われ  
其時大水の 溢 は彼に及ばざらん。爾 は我の 悒鬱なり、爾 は我を 憂より 護り、我

すくい よろこび めぐ われなんぢ おし なんぢ ゆ みち しめ なんぢ みちび  
を 救 の 喜 にて 環らす。○我 爾 を 教えん、爾 に行くべき路を示さん、爾 を 導か

わ めなんぢ かえり なんぢら たづな くつばみ もつ うち つか なんぢ したが  
ん、我が目 爾 を 顧 みる。爾 等は、轡 と 鑣 を以て口を束ねて 爾 に 従わしむる、

むち うま うさぎうま ごと なか あくしゃ うれいおお しゅ たの もの あわれみこれ  
無知なる馬と 驢 との如くなる 母れ。○悪者には 憂 多し、主を 恃む者は 憐 之を

めぐ ぎじん しゅ ため よろこび たのし ころろ なお もの みないわ  
環る。義人よ、主の爲に 喜 び 樂 しめ、心 の直き者よ、皆 祝え。

こうえい ちち こ せいしん き  
光 榮は父と子と聖 神に歸す、



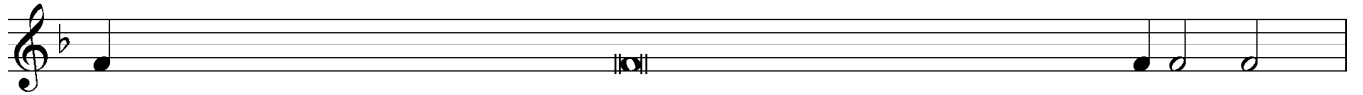
いまもいつもよよに、アミン。  
今 何時 世 世



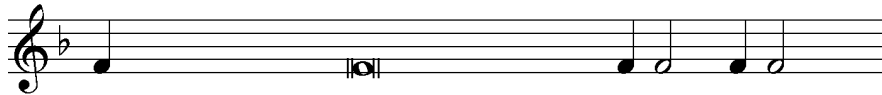
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみよ、こうえいはなんぢにきす。  
神 光 榮 爾 歸



アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみよ、こうえいはなんぢにきす。  
神 光 榮 爾 歸

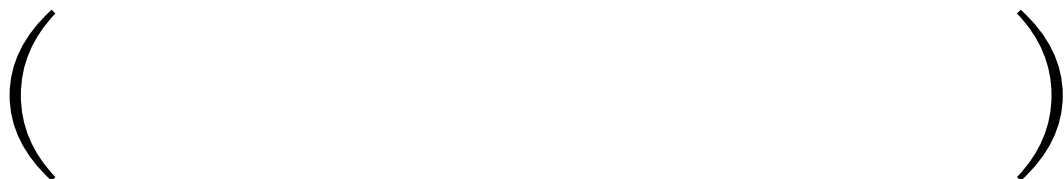


アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみよ、こうえいはなんぢにきす。  
神 光 榮 爾 歸



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ、  
主 憐 主 憐 主 憐

※ 三歌齋經を見る。「第二の誦文の後」に指定する坐誦讃詞、光榮…今も…、生神女讃詞を誦す。



【 第50聖詠 】

誦經) <sup>しゅあわれ</sup>主 憐<sup>しゅあわれ</sup>めよ、主 憐<sup>しゅあわれ</sup>めよ、主 憐<sup>しゅあわれ</sup>めよ、

<sup>こうえい</sup>光 榮は父と子と聖<sup>せいしん</sup>神に歸<sup>き</sup>す、今<sup>いま</sup>も何時<sup>いつ</sup>も世<sup>よ</sup>世<sup>よ</sup>に、アミン。

<sup>かみ</sup>神よ、爾<sup>なんぢ</sup>の大<sup>おおい</sup>なる憐<sup>あわれみ</sup>に因<sup>よ</sup>りて我<sup>われ</sup>を憐<sup>あわれ</sup>み、爾<sup>なんぢ</sup>が惠<sup>めぐみ</sup>の多<sup>おお</sup>きに因<sup>よ</sup>りて我<sup>われ</sup>の不法<sup>ふほう</sup>を抹<sup>け</sup>し給<sup>たま</sup>え。屢<sup>しばしば</sup>我<sup>われ</sup>を我<sup>わ</sup>が不法<sup>ふほう</sup>より洗<sup>あら</sup>い、我<sup>われ</sup>を我<sup>わ</sup>が罪<sup>つみ</sup>より清<sup>きよ</sup>め給<sup>たま</sup>え、蓋<sup>けだし</sup>我<sup>われ</sup>は我<sup>わ</sup>が不法<sup>ふほう</sup>を知<sup>し</sup>る、我<sup>われ</sup>の罪<sup>つみ</sup>は常<sup>つね</sup>に我<sup>わ</sup>が前<sup>まえ</sup>に在<sup>あ</sup>り。我<sup>われ</sup>は爾<sup>なんぢ</sup>獨<sup>ひとり</sup>爾<sup>なんぢ</sup>に罪<sup>つみ</sup>を犯<sup>おか</sup>し、惡<sup>あく</sup>を爾<sup>なんぢ</sup>の目<sup>め</sup>の前<sup>まえ</sup>に行<sup>おこな</sup>えり、爾<sup>なんぢ</sup>は爾<sup>なんぢ</sup>の審<sup>しんだん</sup>斷<sup>ぎ</sup>に義<sup>なんぢ</sup>にして、爾<sup>なんぢ</sup>の裁<sup>さい</sup>判<sup>ばん</sup>に公<sup>おお</sup>なり。視<sup>み</sup>よ、我<sup>われ</sup>は不法<sup>ふほう</sup>に於<sup>お</sup>て妊<sup>はら</sup>まれ、我<sup>われ</sup>が母<sup>はは</sup>は罪<sup>つみ</sup>に於<sup>お</sup>て我<sup>われ</sup>を生<sup>う</sup>めり。視<sup>み</sup>よ、爾<sup>なんぢ</sup>は心<sup>こころ</sup>に眞<sup>しん</sup>實<sup>じつ</sup>のあるを愛<sup>あい</sup>し、我<sup>われ</sup>が衷<sup>うち</sup>に於<sup>お</sup>て智<sup>ち</sup>慧<sup>え</sup>を我<sup>われ</sup>に顯<sup>あら</sup>せり。ヒソ<sup>もつ</sup>プを以<sup>われ</sup>て我<sup>われ</sup>に沃<sup>そ</sup>げ、然<sup>しか</sup>せば我<sup>われ</sup>潔<sup>いさぎよ</sup>くならん、我<sup>われ</sup>を滌<sup>あら</sup>え、然<sup>しか</sup>せば我<sup>われ</sup>雪<sup>ゆき</sup>より白<sup>しろ</sup>くならん。我<sup>われ</sup>に喜<sup>よろこ</sup>と樂<sup>たのしみ</sup>とを聞<sup>き</sup>かせ給<sup>たま</sup>え、然<sup>しか</sup>せば爾<sup>なんぢ</sup>に折<sup>お</sup>られし骨<sup>ほね</sup>は悦<sup>よろこ</sup>ばん。爾<sup>なんぢ</sup>の顔<sup>か</sup>を我<sup>われ</sup>が罪<sup>つみ</sup>より避<sup>さ</sup>け、我<sup>われ</sup>が盡<sup>ことごと</sup>くの不法<sup>ふほう</sup>を抹<sup>け</sup>し給<sup>たま</sup>え。神<sup>かみ</sup>よ、潔<sup>いさぎよ</sup>き心<sup>こころ</sup>を我<sup>われ</sup>に造<sup>つく</sup>れ、正<sup>ただ</sup>しき靈<sup>たましい</sup>を我<sup>われ</sup>の衷<sup>うち</sup>に改<sup>あらた</sup>め給<sup>たま</sup>え。我<sup>われ</sup>を爾<sup>なんぢ</sup>の顔<sup>か</sup>より逐<sup>お</sup>うこと母<sup>なか</sup>れ、爾<sup>なんぢ</sup>の聖<sup>せいしん</sup>神<sup>われ</sup>を我<sup>われ</sup>より取<sup>と</sup>り上<sup>あ</sup>ぐること母<sup>なか</sup>れ。爾<sup>なんぢ</sup>が救<sup>すくい</sup>の喜<sup>よろこ</sup>を我<sup>われ</sup>に還<sup>かえ</sup>せ、主<sup>しゅ</sup>宰<sup>さい</sup>たる神<sup>しん</sup>を以<sup>もつ</sup>て我<sup>われ</sup>を固<sup>かた</sup>め給<sup>たま</sup>え。我<sup>われ</sup>不法<sup>ふほう</sup>の者<sup>もの</sup>に爾<sup>なんぢ</sup>の道<sup>みち</sup>を教<sup>おし</sup>えん、不<sup>ふ</sup>虔<sup>けん</sup>の者<sup>もの</sup>は爾<sup>なんぢ</sup>に歸<sup>かえ</sup>らんとす。神<sup>かみ</sup>よ、我<sup>われ</sup>が救<sup>すくい</sup>の神<sup>かみ</sup>よ、我<sup>われ</sup>を血<sup>ち</sup>より救<sup>すく</sup>い給<sup>たま</sup>え、然<sup>しか</sup>せば我<sup>われ</sup>が舌<sup>した</sup>は爾<sup>なんぢ</sup>の義<sup>ぎ</sup>を讚<sup>ほ</sup>め揚<sup>あ</sup>げん。主<sup>しゅ</sup>よ、我<sup>われ</sup>が唇<sup>くちびる</sup>を啓<sup>ひら</sup>け、然<sup>しか</sup>せば我<sup>われ</sup>が口<sup>くち</sup>は爾<sup>なんぢ</sup>の讚<sup>さん</sup>美<sup>び</sup>を揚<sup>あ</sup>げん、蓋<sup>あ</sup>爾<sup>なんぢ</sup>は祭<sup>まつり</sup>を欲<sup>ほつ</sup>せず、欲<sup>ほつ</sup>せば我<sup>われ</sup>此<sup>これ</sup>を獻<sup>たて</sup>らん、爾<sup>なんぢ</sup>は燔<sup>や</sup>祭<sup>まつり</sup>を喜<sup>よろこ</sup>ばず。神<sup>かみ</sup>に喜<sup>よろこ</sup>ばる祭<sup>まつり</sup>は痛<sup>つう</sup>悔<sup>かい</sup>の靈<sup>たましい</sup>なり、痛<sup>つう</sup>悔<sup>かい</sup>して謙<sup>けん</sup>遜<sup>そん</sup>なる心<sup>こころ</sup>は、神<sup>かみ</sup>よ、爾<sup>なんぢ</sup>輕<sup>なんぢ</sup>んじ給<sup>たま</sup>わす。主<sup>しゅ</sup>よ、爾<sup>なんぢ</sup>の惠<sup>めぐみ</sup>に因<sup>よ</sup>りて恩<sup>おん</sup>をシオン<sup>た</sup>に垂<sup>た</sup>れ、イエルサリム<sup>じょうえん</sup>の城<sup>た</sup>垣<sup>たま</sup>を建<sup>その</sup>て給<sup>なんぢ</sup>え。其<sup>ま</sup>時<sup>た</sup>に爾<sup>なんぢ</sup>義<sup>ぎ</sup>の祭<sup>まつり</sup>、獻<sup>さ</sup>げ物<sup>もの</sup>と燔<sup>や</sup>祭<sup>まつり</sup>とを喜<sup>よろこ</sup>び饗<sup>う</sup>けん、其<sup>その</sup>時<sup>とき</sup>に人<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>爾<sup>なんぢ</sup>の祭<sup>さい</sup>壇<sup>だん</sup>に膺<sup>こうし</sup>を奠<sup>そな</sup>えんとす。

司祭) 神<sup>かみ</sup>よ、爾<sup>なんぢ</sup>の民<sup>たみ</sup>を救<sup>すく</sup>い、及<sup>およ</sup>び爾<sup>なんぢ</sup>の嗣<sup>しぎょう</sup>業<sup>ふく</sup>に福<sup>くだ</sup>を降<sup>たま</sup>し給<sup>じれん</sup>え、慈<sup>こう</sup>憐<sup>おん</sup>と洪<sup>もつ</sup>恩<sup>なんぢ</sup>とを以<sup>て</sup>て爾

の世界<sup>せかい</sup>に臨<sup>のぞ</sup>み、正<sup>せい</sup>教<sup>きょう</sup>のハリスティア<sup>ら</sup>ニン<sup>つ</sup>等の角<sup>たこ</sup>を高<sup>われ</sup>うし、我<sup>われ</sup>等に爾<sup>なんぢ</sup>の豊<sup>ゆた</sup>なる憐<sup>あわれ</sup>みを垂<sup>た</sup>れ給<sup>たま</sup>え、至<sup>しじょう</sup>淨<sup>われ</sup>なる我<sup>われ</sup>等の光<sup>こう</sup>榮<sup>えい</sup>の女<sup>ぢよ</sup>宰<sup>さい</sup>・生<sup>しょう</sup>神<sup>しん</sup>女<sup>ぢよ</sup>・永<sup>えい</sup>貞<sup>てい</sup>童<sup>どう</sup>女<sup>ぢよ</sup>マリヤ<sup>ぢよ</sup>の禱<sup>いのり</sup>と、生命<sup>いのち</sup>を施<sup>ほ</sup>す尊<sup>とう</sup>き十<sup>じゅう</sup>字<sup>じ</sup>架<sup>か</sup>の力<sup>ちから</sup>と、無<sup>む</sup>形<sup>けい</sup>なる尊<sup>とう</sup>き天<sup>てん</sup>軍<sup>ぐん</sup>、光<sup>こう</sup>榮<sup>えい</sup>なる尊<sup>とう</sup>き預<sup>よ</sup>言<sup>げん</sup>者<sup>しゃ</sup>・前<sup>ぜん</sup>驅<sup>く</sup>・



じゅせん こうえい さんび せいしと われら せいしんぶ せかい だいきょうし せいせいしゃ  
授洗イオアン、光榮にして讚美たる聖使徒、我等の聖神父・世界の大神師・成聖者・

だい しんがくしゃ きんこう われら せいしんぶ  
大ヴァシリィ、神學者グリゴリイ、金口イオアン、我等の聖神父・ミラリキヤの

だいしゅきょう きせきしゃ われら せいしんぶ にほん あしと だいしゅきょう こうえい  
大主教・奇蹟者ニコライ、我等の聖神父・日本の使徒・大主教ニコライ、光榮な

がいせん せいちめいしゃ こくしょうほうしん わ しよしんぶ せい ぎ かみ そふぼ  
る凱旋の聖致命者、克肖捧神なる我が諸神父、聖にして義なる神の祖父母イオアキム

およ およ しょせいじん てんたつ よ だいじんじ しゅ なんぢ もと われら ざいにんなんぢ  
及びアンナ、及び諸聖人の轉達に因りて、大仁慈の主よ、爾に求む、我等罪人 爾

いのものきい われら あわれ  
に禱る者に聆き納れて、我等を憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ、しゅあわれめ、しゅあわれめ、  
主憐 主憐 主憐 主憐 主憐



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ、しゅあわれめ、  
主憐 主憐 主憐 主憐 主憐



しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主憐 主憐

なんぢ どくせいし じんじ じれん じんあい よ なんぢ かれ しせいしぜん いのち ほどこ  
司祭) 爾が獨生子の仁慈と慈憐と仁愛とに因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施

なんぢ しん とも さんよう いま いつ よよ  
す 爾の神と偕に讚揚せらる、今も何時も世に、



アミン。

【 規程 (カノン) 】

※三歌齋經を見る。指定する歌頌を行う。



【 小聯禱 】 (第八歌頌の前)

われらまたまたあんわ しゅ いの  
司祭) 我等復又安和にして主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ な んぢ に 。  
主 爾

司祭) 蓋爾は我等の神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世に、



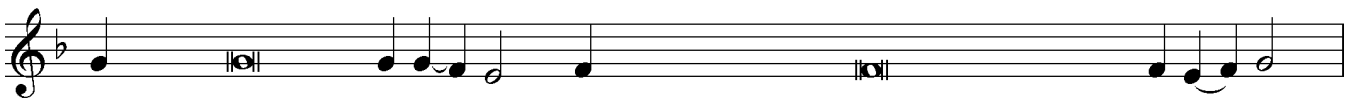
ア ミ ン。

※三歌齋經を見る。第八歌頌を行う。



【 我が心は主を崇め 】

司祭) 生神女、光の母を讃歌を以て讃め揚げん、



わがころはしゅをあがめ、わがたましいはかみわがきゆうしゅをよろこぶ。  
我心 主崇 我靈 神我救主悦



ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびなくさかえ、みさおをやぶらずし  
尊 並 榮 貞 操 壊



てかみことばをうみし、じつのしょうしんぢよたるな んぢをあがめほ 讃む。  
神 言 生 實 生 神 女 爾 ぢを 崇 讃



そのひのいやしきをかえりみたまえり、いまよりよろづよわれを  
其 婢 卑 願 給 今 萬 世 我



さいわいなるといわん。  
福 謂



ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびなくさかえ、みさおをやぶらずし  
尊 並 榮 え 貞 操 壊



てかみことばをうみし、じつのしょうしんぢよたるな んぢをあがめほ 讃む。  
神 言 生 實 生 神 女 爾 ぢを 崇 讃



ちからをもちたまえるものはわがためにおおいなることをなせり、その  
權 能 有 給 者 我 爲 大 事 成 其



なはせいなり、そのあわれみはよよかれをおそるるものにのぞまん。  
名 聖 其 憐 世 世 彼 畏 者 臨



ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびなくさかえ、みさおをやぶらずし  
尊 並 榮 え 貞 操 壊



てかみことばをうみし、じつのしょうしんぢよたるな んぢをあがめほ 讃む。  
神 言 生 實 生 神 女 爾 ぢを 崇 讃



そのひぢのちからをあらわして、こころのおごれるものをちらしたまえり。  
其 臂 力 顯 心 驕 者 散 給



ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびなくさかえ、みさおをやぶらずし  
尊 並 榮 え 貞 操 壊



てかみことばをうみし、じつのしょうしんぢよたるな んぢをあがめほ 讃む。  
神 言 生 實 生 神 女 爾 ぢを 崇 讃



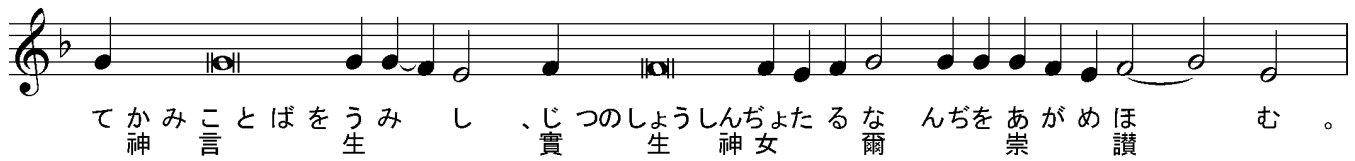
けんあるものをくらいよりしりぞけ、いやしきものをあげ、うるものを  
 権者位 黜卑者 陟 飢者



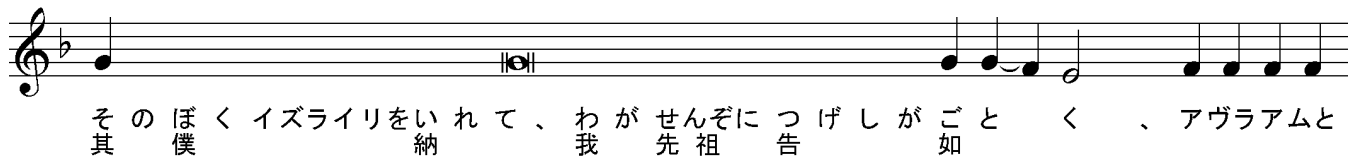
ぜんにあかせ、とめるものをむなしくかえらせたまえり。  
 善飽 富者 空返 給



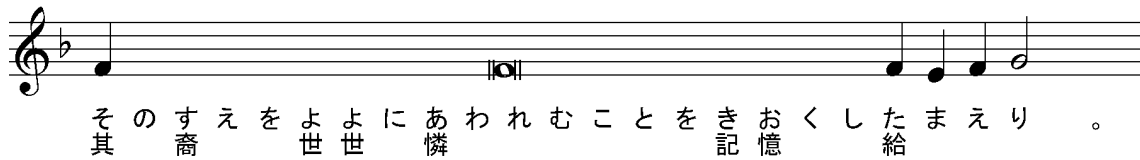
ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびなくさかえ、みさおをやぶらずし  
 尊 並 榮 貞操 壞



てかみことばをうみし、じつのしょうしんぢよたるなんぢをあがめほむ。  
 神言 生 實 生 神女 爾 崇 讚 む。



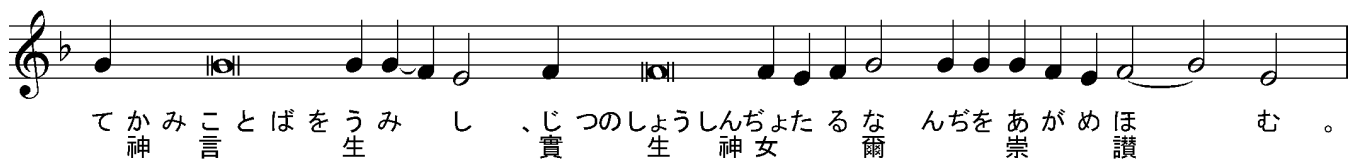
そのぼくイズライリをいれて、わがせんぞにつげしがごとく、アヴラアムと  
 其 僕 納 我 先祖 告 如



そのすえをよよにあわれむことをきおくしたまえり。  
 其 裔 世世 憐 記憶 給



ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびなくさかえ、みさおをやぶらずし  
 尊 並 榮 貞操 壞



てかみことばをうみし、じつのしょうしんぢよたるなんぢをあがめほむ。  
 神言 生 實 生 神女 爾 崇 讚 む。

※三歌齋經を見る。第九歌頌を行う。



【 常に福にして 】



つねにさいわいにして まったくきずなきしよ うしんぢよ  
 常 福 全 瑕 生 神女、

わが かみの ははなる なんぢを さんびする はま ことにあたれ り。  
 吾 神 母 爾 讚美 眞 當

ヘルヴィムより と う と く セラフィムにならびなくさか え、みさおを  
 尊 並 榮 え、み 貞 操

やぶらずしてかみことばをうみしじつしょうしんぢよたるなんぢを  
 壊 神 言 生 實 生 神 女 爾

あがめほむ。

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ しゅ いの  
 我等復又安和にして主に禱らん、

しゅ あわれめよ。  
 主 憐

司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅ あわれめよ。  
 主 憐

司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ  
 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら  
 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく  
 生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅ な んぢ に。  
 主 爾 ぢに

司祭) けだしてん しゅうぐんなんぢ さんよう われら こうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ  
 蓋天の衆軍爾を讚揚す、我等も光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も

よよ  
 世に、



われ すく たま  
我を救い給え。

いま いつ よよ  
今も何時も世に、アミン、

かみ なんぢ ひかり つかわ しょうしんぢよ きとう よ わ ころ てら  
ハリストス神よ、爾の光を遣し、生神女の祈禱に因りて、我が心を照して、

われ すく たま  
我を救い給え。

しゅ なんぢ せかい ひかり かがや なんぢ むけい もの てんたつ よ くらやみ あ わ  
第4調) 主よ、爾の世界に光を輝かし、爾が無形の者の轉達に因りて、幽暗に在る我

たましい もろもろ つみ きよ われ すく たま  
が靈を諸の罪より潔めて、我を救い給え。

こうえい ちち こ せいしん き  
光榮は父と子と聖神に歸す、

しゅ なんぢ せかい ひかり かがや なんぢ せいじん きとう よ くらやみ あ わ たましい  
主よ、爾の世界に光を輝かし、爾が聖人の祈禱に因りて、幽暗に在る我が靈

もろもろ つみ きよ われ すく たま  
を諸の罪より潔めて、我を救い給え。

いま いつ よよ  
今も何時も世に、アミン、

しゅ なんぢ せかい ひかり かがや しょうしんぢよ きとう よ くらやみ あ わ たましい  
主よ、爾の世界に光を輝かし、生神女の祈禱に因りて、幽暗に在る我が靈

もろもろ つみ きよ われ すく たま  
を諸の罪より潔めて、我を救い給え。

ひかり ほどこ しゅ なんぢ ひかり つかわ なんぢ むけい もの てんたつ よ わ ころ  
第5調) 光を施す主よ、爾の光を遣し、爾が無形の者の轉達に因りて、我が心を

てら われ すく たま  
照して、我を救い給え。

こうえい ちち こ せいしん き  
光榮は父と子と聖神に歸す、

ひかり ほどこ しゅ なんぢ ひかり つかわ なんぢ せいじん きとう よ わ ころ てら  
光を施す主よ、爾の光を遣し、爾が聖人の祈禱に因りて、我が心を照し

われ すく たま  
て、我を救い給え。

いま いつ よよ  
今も何時も世に、アミン、

ひかり ほどこ しゅ なんぢ ひかり つかわ しょうしんぢよ きとう よ わ ころ てら  
光を施す主よ、爾の光を遣し、生神女の祈禱に因りて、我が心を照して、

われ すく たま  
我を救い給え。

しゅ なんぢ むけい もの てんたつ よ なんぢ えいざい ひかり われら たましい つかわ たま  
第6調) 主よ、爾が無形の者の轉達に因りて、爾の永在の光を我等の靈に遣し給

え。

こうえい ちち こ せいしん き  
光榮は父と子と聖神に歸す、

しゅ なんぢ せいじん きとう よ なんぢ えいざい ひかり われら たましい つかわ たま  
主よ、爾が聖人の祈禱に因りて、爾の永在の光を我等の靈に遣し給え。





ゆき きり しゅ ことば したが ぼうふう やま ことごと おか くだもの き ことごと はくこうぼく  
雪と霧、主の言に従う暴風、山と悉くの陵、果の樹と悉くの栢香木、  
やじゅう もろもろ かちく は ものと とり ち しよおう ばんみん ぼくはく ち しよゆうし しょうねん  
野獣と諸の家畜、匍う物と飛ぶ鳥、地の諸王と萬民、牧伯と地の諸有司、少年  
しよぢよ おきな わらべ しゅ な ほ あ けだしただそのな たか あ そのこうえい てんち  
と處女、翁と童は、主の名を讃め揚ぐべし、蓋惟其名は高く擧げられ、其光榮は天地  
あまね かれ そのたみ つの たか そのしよせいじん しよし かれ した たみ さかえ  
に偏し。彼は其民の角を高くし、其諸聖人、イスライリの諸子、彼に親しき民の榮  
たか  
を高くせり。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

しゅわれら かみ こうえい なんぢ き われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ  
主我等の神よ、光榮は爾に歸す、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時  
よよ  
も世世に、アミン。

こうえい なんぢ われら ひかり あらわ しゅ き  
光榮は爾、我等に光を顯せる主に歸す。

いとたかき こうえいかみ き ち へいあんくだ ひと めぐみのぞ しゅてん おう かみちち  
至高には光榮神に歸し、地には平安降り、人には恵臨めり。主天の王、神父  
ぜんのおうしゃ しゅどくせい こ およ せいしん なんぢ おおい こうえい よ  
全能者よ、主獨生の子イススハリストス、及び聖神よ、爾の大なる光榮に因り  
われらなんぢ あが なんぢ ほ あ なんぢ ふ おが なんぢ とうと うた なんぢ かんしゃ  
て、我等爾を崇め、爾を讃め揚げ、爾を伏し拜み、爾を尊み歌い、爾に感謝  
しゅかみ かみ こひつじ ちち こ よ つみ にな もの われら あわれ たま よ もろもろ  
す。主神よ、神の羔、父の子、世の罪を任いし者よ、我等を憐み給え、世の諸  
つみ にな もの われら いのり い たま ちち みぎ ざ もの われら あわれ たま  
の罪を任いし者よ、我等の禱を納れ給え。父の右に坐する者よ、我等を憐み給え。  
なんぢ ひとりせい なんぢ ひとりしゅ かみちち こうえい あらわ もの  
爾は獨聖なり、爾は獨主イススハリストス、神父の光榮を顯す者なればなり、  
アミン。

われやや なんぢ ほ あ なんぢ な よよ あが うた  
我夜夜に爾を讃め揚げ、爾の名を世世に崇め歌わん。

しゅ なんぢ よよわれら かくれが われかつ い しゅ われ あわれ わ たましい いや  
主よ、爾は世世我等の避所たり。我曾て言えり、主よ、我を憐み、我が靈を醫  
たま われつみ なんぢ え しゅ なんぢ はし つ なんぢ むね おこな われ おし  
し給え、我罪を爾に得たればなり。主よ、爾に趨り附く、爾の旨を行うを我に教  
たま なんぢ われ かみ いのち みなもと なんぢ あ われらなんぢ ひかり おい ひかり み  
え給え、爾は我の神、生命の源は爾に在ればなり、我等爾の光に於て光を觀  
あわれみ なんぢ し もの つね た たま  
ん。憐を爾を知る者に恒に垂れ給え。

しゅ われ まも つみ こ よ わた たま しゅわ せんぞ かみ なんぢ あが ほ  
主よ、我を守り罪なくして此の夜を度らせ給え。主吾が先祖の神よ、爾は崇め讃め

なんぢ な よよ とうと うた  
られ爾の名は世世に尊み歌わる、アミン。

しゅ なんぢ たの よ なんぢ あわれみ われら た たま しゅ なんぢ あが ほ  
主よ、爾を恃むに因りて、爾の憐を我等に垂れ給え。主よ、爾は崇め讃めらる、

なんぢ いましめ われ おし たま しゅさい なんぢ あが ほ なんぢ いましめ われ さと  
 爾の誠を我に訓え給え。主宰よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に悟らせ  
 たま せい もの なんぢ あが ほ なんぢ いましめ われ てら たま しゅ なんぢ  
 給え。聖なる者よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠にて我を照し給え。主よ、爾の  
 あわれみ よよ あ なんぢ て つく もの す なか ほまれ なんぢ き うた なんぢ き  
 憐は世に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿れ。讃は爾に歸し、歌は爾に歸し、  
 こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
 光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

【 増聯禱 】

司祭) われらしゅ まえ わ あさ いのり ま くわ  
 我等主の前に吾が朝の禱を増し加えん、



司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと  
 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



司祭) へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま しゅ もと  
 平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、



司祭) われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと  
 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



司祭) われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと  
 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



司祭) われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと  
 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



しゅ た ま え よ 。  
主 賜

司祭) 我<sup>われら</sup>等<sup>いのち</sup>の生命<sup>おわり</sup>の 終<sup>かな</sup> がハリストス<sup>やまい</sup>ティアノン<sup>はぢ</sup>に<sup>へいあん</sup>適<sup>およ</sup>い、疾<sup>おそ</sup>なく、耻<sup>べ</sup>なく、平<sup>しんぱん</sup>安<sup>おい</sup>なること、及<sup>よろ</sup>びハ

リストス<sup>おそ</sup>の畏<sup>べ</sup>る可<sup>しんぱん</sup>き審<sup>おい</sup>判<sup>よろ</sup>に於<sup>こたえ</sup>て宜<sup>たま</sup>しき對<sup>もと</sup>をなすを賜<sup>たま</sup>わんことを求<sup>もと</sup>む、



しゅ た ま え よ 。  
主 賜

司祭) 至<sup>しせいしけつ</sup>聖<sup>いた</sup>至<sup>さんび</sup>潔<sup>われら</sup>にして至<sup>こうえい</sup>りて讚<sup>ぢよさい</sup>美<sup>しょうしんぢよ</sup>たる我<sup>えいていどうぢよ</sup>等<sup>えいていどうぢよ</sup>の光<sup>えいていどうぢよ</sup>榮<sup>えいていどうぢよ</sup>の女<sup>えいていどうぢよ</sup>宰<sup>えいていどうぢよ</sup>、生<sup>えいていどうぢよ</sup>神<sup>えいていどうぢよ</sup>女<sup>えいていどうぢよ</sup>、永<sup>えいていどうぢよ</sup>貞<sup>えいていどうぢよ</sup>童<sup>えいていどうぢよ</sup>女<sup>えいていどうぢよ</sup>マリヤと、

諸<sup>しよせいじん</sup>聖<sup>きおく</sup>人<sup>きおく</sup>を記<sup>われら</sup>憶<sup>おのれ</sup>して、我<sup>みおよ</sup>等<sup>みおよ</sup>己<sup>たがい</sup>の身<sup>おのおの</sup>及<sup>み</sup>び互<sup>もつ</sup>に各<sup>ならび</sup>の身<sup>ことごと</sup>を以<sup>われら</sup>て、並<sup>われら</sup>に悉<sup>われら</sup>くの我<sup>われら</sup>等<sup>われら</sup>の

生命<sup>いのち</sup>を以<sup>もつ</sup>て、ハリストス<sup>かみ</sup>神<sup>いたく</sup>に委<sup>いたく</sup>託<sup>いたく</sup>せん、



しゅ な ん ぢ に 。  
主 爾

司祭) 蓋<sup>けだしなんぢ</sup> 爾<sup>じんじ</sup> は仁<sup>じれん</sup>慈<sup>じんあい</sup>と慈<sup>かみ</sup>憐<sup>われら</sup>と仁<sup>われら</sup>愛<sup>こうえい</sup>との神<sup>なんぢちち</sup>なり、我<sup>こ</sup>等<sup>せいしん</sup>光<sup>けん</sup>榮<sup>けん</sup>を爾<sup>けん</sup> 父<sup>けん</sup>と子<sup>けん</sup>と聖<sup>けん</sup>神<sup>けん</sup>に獻<sup>けん</sup>ず、今<sup>いま</sup>

も何<sup>いつ</sup>時<sup>よよ</sup>も世<sup>よよ</sup>世<sup>よよ</sup>に、



ア ミ ン。

司祭) 衆<sup>しゅうじん</sup> 人<sup>へいあん</sup>に平<sup>へいあん</sup>安<sup>へいあん</sup>、



な ん ぢ の し ん に も 。  
爾 神

司祭) 我<sup>われら</sup>等<sup>こうべ</sup>の首<sup>しゅ</sup>を主<sup>かが</sup>に屈<sup>かが</sup>めん、



しゅ な ん ぢ に 。  
主 爾

司祭) (黙<sup>せい</sup>誦<sup>しゅ</sup>: 聖<sup>たか</sup>なる主<sup>お</sup>、高<sup>いやし</sup>きに居<sup>のぞ</sup>り卑<sup>なんぢ</sup>きを臨<sup>み</sup>み、爾<sup>ところ</sup>が見<sup>め</sup>ざる所<sup>ばんぶつ</sup>なき目<sup>かんがみ</sup>にて萬<sup>かんがみ</sup>物を 鑒<sup>かんがみ</sup>る

もの 者<sup>われら</sup>よ、我<sup>われら</sup>等<sup>ころ</sup>心<sup>からだ</sup>と體<sup>くび</sup>との項<sup>なんぢ</sup>を爾<sup>まえ</sup>の前<sup>かが</sup>に屈<sup>なんぢ</sup>めて爾<sup>いの</sup>に禱<sup>なんぢ</sup>る、爾<sup>み</sup>が見<sup>て</sup>えざる手<sup>て</sup>を

爾<sup>なんぢ</sup>が聖<sup>せい</sup>なる住<sup>すまい</sup>居<sup>の</sup>より伸<sup>われら</sup>べて、我<sup>しゅうじん</sup>等<sup>ふく</sup>衆<sup>くだ</sup>人<sup>たま</sup>に福<sup>われら</sup>を降<sup>じゅうある</sup>し給<sup>い</sup>え、我<sup>い</sup>等<sup>い</sup>に自由<sup>い</sup>或<sup>い</sup>は

じゆう おか つみ なんぢぜん ひと あい かみ よ これ ゆる  
自由ならずして犯しし罪あらば、爾善にして人を愛する神なるに依りて之を赦

われら こんせらいせ しょぜん あた たま  
して、我等に今世來世の諸善を與え給え、)

けだしわ かみ われら あわれ すく なんぢ き われらこうえい なんぢちち こ せいしん  
蓋我が神よ、我等を憐みて救うこと爾に歸す、我等光榮を爾父と子と聖神に

けん いま いつ よよ  
獻ず、今も何時も世世に、



※ 三歌齋經を見る。指定された挿句讃詞、致命者讃詞、光榮…今も…、生神女讃詞。句は次の通り。

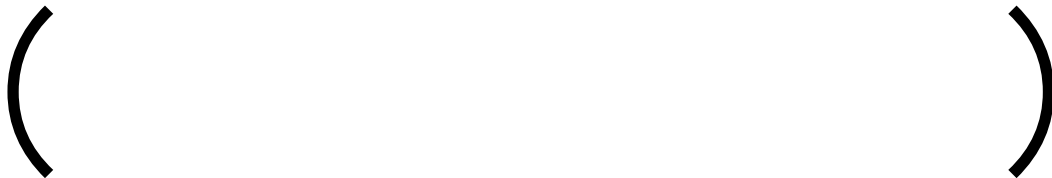
しゅ つと なんぢ あわれ もつ われら あ しか われらしょうがいよろこ たのし なんぢ  
①主よ、夙に爾の憐みを以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂まん。爾

われら う ひ われら わざわい あ とし か われら たのし たま ねが なんぢ わざ  
我等を撲ちし日、我等が禍に遭いし年に代えて、我等を樂ましめ給え。願わくは爾の工作

なんぢ しょぼく あらわ なんぢ こうえい その しょし あらわ  
は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其の諸子に著れん。

ねが しゅわ かみ めぐみ われら あ ねが わ て わざ われら たす たま わ て  
②願わくは主吾が神の恵は我等に在らん、願わくは我が手の工作进行を我等に助け給え、我が手の

わざ たす たま  
工作进行を助け給え。



しじょうしゃ しゅ さんえい なんぢ な うた なんぢ あわれみ あさ の なんぢ まこと よる  
誦經) 至上者よ、主を讚榮し、爾の名に歌い、爾の憐を朝に宣べ、爾の眞を夜に

の び  
宣ぶるは美なるかな。

しじょうしゃ しゅ さんえい なんぢ な うた なんぢ あわれみ あさ の なんぢ まこと よる  
至上者よ、主を讚榮し、爾の名に歌い、爾の憐を朝に宣べ、爾の眞を夜に

の び  
宣ぶるは美なるかな。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち ゆる  
至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を赦

せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ  
せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ  
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。アミン。

てん いま われら ちち ねがわく なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん  
天に在す我等の父よ、願は爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天

おこな ごと ち おこな わ にちよう かに こんにちわれら あた たま われら  
に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に

おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なおわれら  
債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我等

きょうあく すく たま  
を凶惡より救い給え。

けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
司祭) 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。



しょうしんぢょ てん もん われらなんぢ こうえい どう た ところ てん た ごと いの  
誦經) 生神女、天の門よ、我等爾が光榮の堂に立つに、意は天に立つが如し、祈る、

われら ため なんぢ あわれみ もん ひら たま  
我等の爲に爾が憐の門を開き給え。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ  
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン。

とうと ならび さか みさお やぶ かみことば う じつ  
ヘルヴィムより尊く、セラフィムに並なく榮え、貞操を壊らずして神言を生みし實の

しょうしんぢょ なんぢ あが ほ  
生神女たる爾を崇め讃む。

しんぷ しゅ な も ふく くだ  
神父よ、主の名を以て福を降せ。

えいざい しゅ われら かみ つね あが ほ いま いつ よよ  
司祭) 永在の主ハリストス我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、



てん おう わ くに たす せいきょう かた いきょう したが せかい おだやか よ こ  
誦經) 天の王よ、我が國を佑け、正教を固め、異教を順わせ、世界を穩にし、克く此

せいどう まも すで す さ われら しょふけいてい ぎじん すまい お ならび われら つうかい  
の聖堂を護り、已に過ぎ去りし我等の諸父兄弟を義人の住居に置き、並に我等の痛悔

うけとめ い たま なんぢ じんじ ひと あい しゅ  
と承認とを納れ給え、爾は仁慈にして人を愛する主なればなり。

【 聖エフレムの祝文 】

司祭) しゅ わ いのち しゅさい おこたり もだえ しのぎ むだごと ころろ われ あた なか  
主、吾が生命の主 宰よ、怠 惰と、愁悶と、陵駕と、空談の 情 を我に與うる 勿れ。

みさお へりくだり ころえ あい ころろ われなんじ ぼく あた たま  
貞操と、謙 遜と、忍耐と、愛の 情 を我 爾 の僕に與え 給え。

ああ しゅおう われ わ つみ み わ けいてい ぎ たま けだしなんぢ よよ あが ほ  
嗚呼、主 王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざるを賜え、蓋 爾 は世世に崇め讃

めらる、アミン。

かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま  
神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、

かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま  
神よ我罪人を浄め給え神よ、我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、

しゅ わ いのち しゅさい おこたり もだえ しのぎ むだごと ころろ われ あた なか みさお  
主、吾が生命の主 宰よ、怠 惰と、愁悶と、陵駕と、空談の 情 を我に與うる 勿れ。貞操

と、謙 遜と、忍耐と、愛の 情 を我 爾 の僕に與え 給え。嗚呼、主 王よ、我に我が罪

を見、我が兄弟を議せざるを賜え、蓋 爾 は世世に崇め讃めらる、アミン。

【 第一時課 】

誦經) きた われら おう かみ こうはい  
來れ、我等の王・神に叩 拜せん。

きた われら おう かみ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王・神に叩 拜俯伏せん。

きた われら おう かみ まえ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩 拜俯伏せん。

【 第5聖詠 】

しゅ わ ことば き わ おもい さと わ おうわ かみ わ よ こえ き い たま  
主よ、我が言を聴き、我が思を悟れ。我が王我が神よ、我が呼ぶ聲を聴き納れ給え、

われなんぢ いの しゅ あした わ こえ き たま われあした なんぢ まえ た ま  
我 爾 に祈ればなり。主よ、晨に我が聲を聴き給え、我 晨に 爾 の前に立ちて待たん。

けだしなんぢ ふほう よろこ かみ あくにん なんぢ お え ふけん もの なんぢ め まえ  
蓋 爾 は不法を喜ばざる神なり、悪人は 爾 に居るを得ず、不虔の者は 爾 が目の前に

とどま なんぢ およ ふほう おこな もの にく なんぢ いつわり い もの ほろぼ ざんにん  
止らざらん、爾は凡そ不法を行う者を憎む、爾は 謊 を言う者を滅さん、残忍

きけつ もの しゅこれ にく ただわれなんぢ あわれみ おお よ なんぢ いえ い なんぢ おそ  
詭譎の者は主之を悪む。惟我 爾 が 憐 の多きに寄りて 爾 の家に入り、 爾 を畏れ

なんぢ せいどう ふくはい しゅ わ てき たため われ なんぢ ぎ みちび わ まえ なんぢ  
て 爾 が聖堂に伏拜せん。主よ、我が敵の爲に我を 爾 の義に導き、我が前に 爾 の

みち たいらか けだしかれら くち しんじつ かれら ころろ あくぎやく かれら のんど ひら  
道を 平 にせよ。蓋 彼等の口には眞實なく、彼等の心は 惡 逆、彼等の喉は開け

ひつぎ そのした こ へつら かみ かれら つみ さだ かれら そのはかりごと もつ みづか やぶ  
たる 枢、其舌にて媚び 諂う。神よ彼等の罪を定め、彼等に其 謀 を以て自ら敗

かれら ふけん はなはだ よ これ お たま かれらなんぢ さか およ なんぢ  
れしめ、彼等が不虔の 甚 しきに依りて之を逐い給え、彼等 爾 に逆らえばなり。凡そ 爾

たの もの よろこ なが たのし なんぢ かれら おお まも なんぢ な あい もの なんぢ  
を頼む者は 喜 びて永く 樂 み、爾 は彼等を庇い護らん、爾 の名を愛する者は 爾 を

もつ みづか ほこ けだししゅ なんぢ ぎじん ふく くだ めぐみ もつ たて ごと かれ めぐ  
以て 自 ら 詔 らんとす。蓋 主よ、爾 は義人に福を降し、恵 を以て盾の如く彼を環

らし 衛 ればなり。

## 【 第 89 聖詠 】

しゅ なんぢ よよ われら かくれが やまいま しょう なんぢいま ち ぜんせかい つく  
主よ、爾 は世世に我等の避 所 たり。山 未 だ 生 ぜず、爾 未 だ 地 と 全 世 界 と を 造 ら

ざる 先、且 世 より 世 まで 爾 は 神 なり。爾 人 を 塵 に 歸 ら し め て 曰 う、人 の 子 よ、 歸 れ

と。蓋 爾 が 目 の 前 に は、千 年 は 過 ぎ し 昨 日 の 如 く、夜 間 の 更 の 如 し。爾 は 大 水 の

ごと かれら なが かれら ゆめ ごと あさ お くさ ごと あさ はな かつ あお くれ  
如く彼等を流す、彼等は夢の如く、朝に生うる草の如し、朝には花さきて且青し、暮

には刈られて稿る。蓋 我等は 爾 の 怒 に 因 り て 消 え、爾 の 憤 に 因 り て 惶 れ 惑 う。

なんぢ われら ふほう なんぢ まえ お われら かく こと なんぢ かんばせ ひかり まえ お  
爾 は我等の不法を 爾 の 前 に 置 き、我 等 の 隠 れ た る 事 を 爾 が 顔 の 光 の 前 に 置 け

り。我 等 が 悉 く の 日 は 爾 が 怒 の 中 に 過 ぎ、我 等 は 我 が 歳 を 失 う こと 音 の 如 し。我

が 歳 の 數 は 七 十 年、或 は 健 な れ ば 八 十 年 乃 ち、其 間 の 壯 なる 時 も、劬 勞 と

やまい けだしそのす すみやか われら と さ だれ なんぢ いかり ちから し また  
疾病あり、蓋 其 過 ぐ る こと 速 に して、我 等 飛 び 去 る。誰 か 爾 が 怒 の 力 を 知 り、又

なんぢ おそ ほど よ なんぢ いきどおり し ねが われら わ ひ かぞ う おし  
爾 を 畏 る 度 に 依 り て 爾 の 憤 を 識 ら ぬ。願 わ く は 我 等 に 我 が 日 を 算 う る こと を 教

えて、智慧の 心 を 獲 し め 給 え。主 よ、面 を 回 せ、何 の 時 に 至 る か、爾 の 僕 を 憐 み

たま つと なんぢ あわれ もつ われら あ しか われら しょうがいよるこ たのし なんぢ  
給え。夙に 爾 の 憐 み を 以 て 我 等 に 飽 か し め よ、然 せ ば 我 等 生 涯 歡 び 樂 ま ぬ。爾

われら う ひ われら わざわい あ とし か われら たのし たま ねが なんぢ  
我 等 を 撲 ち し 日、我 等 が 禍 に 遭 い し 年 に 代 えて、我 等 を 樂 ま し め 給 え。願 わ く は 爾

わが なんぢ しょぼく あらわ なんぢ こうえい その しょし あらわ ねが しゅわ かん  
の 工 作 は 爾 の 諸 僕 に 著 れ、爾 の 光 榮 は 其 の 諸 子 に 著 れ ぬ、願 わ く は 主 吾 が 神 の

めぐみ われら あ ねが わ て わざ われら たす たま わ て わざ たす たま  
恵 は 我 等 に 在 ら ぬ、願 わ く は 我 が 手 の 工 作 を 我 等 に 助 け 給 え、我 が 手 の 工 作 を 助 け 給 え。

## 【 第 100 聖詠 】

われあわれみ しんばん うた しゅ なんぢ うた たてまつ われきず みち おも なんぢ  
我 憐 と 審 判 と を 歌 わ ぬ、主 よ、爾 に 歌 を 奉 ら ぬ。我 玷 な き 道 を 思 わ ぬ、爾

いづれ ときわれ いた われきず ころもつ わ いえ うち ゆ わ め まえ よこしま  
何 の 時 我 に 至 る か、我 玷 な き 心 を 以 て 我 が 家 の 中 を 行 か ぬ。我 が 目 の 前 に は 邪 な

もの お ほう そむ おこない われこれ にく そ かならずわれ つ やぶ ころも  
る 物 を 置 か ざ ら ぬ、法 に 背 く 行 は 我 之 を 疾 む、其 れ 必 我 に 附 か ざ ら ぬ。壊 れ し 心

われとお あもの われこれ し ひそか おのれ となり そしもの われこれ お  
 は我に遠ざかり、悪しき者は我之を識らざらん。隱に己の隣を諂る者は我之を逐い、  
 めおご ころろたか もの われこれ い わめ こち まこと もの かえり かれら  
 目傲り、心高ぶる者は我之を容れざらん。我が目は斯の地の忠信なる者を顧みて、彼等  
 わ かたわら お きず みち ゆ もの われ つか ふたごころ おこな もの わ いえ  
 を我が傍に居らしめん、玷なき道を行く者は我に事えん。貳心を行ふ者は我が家  
 お え いつわり い もの わめ まえ とどま あした われこち ことごと ふけん  
 に居るを得ず、謊を言う者は我が目の前に止らざらん。晨に我此の地の悉くの不虔  
 しゃ ほろぼ およ ふほう おこな もの しゅ まち た  
 者を滅して、凡そ不法を行ふ者を主の城邑より絶たれしめん。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ  
 主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

【 讃詞 】

司祭) わがおうわが かみ あした わが こえ き たま  
 吾が王吾が神よ、晨に我が聲を聞き給え、

わがおうわが かみよ、あしたにわがこえをききたまえ。

司祭) しゅ わがことば き わ おもい さと  
 主よ、我が言を聞き、我が思を悟れ、

わがおうわが かみよ、あしたにわがこえをききたまえ。

司祭) しゅ われなんぢ いの  
 主よ、我爾に禱ればなり、

わがおうわが かみよ、あしたにわがこえをききたまえ。

司祭) こうえい ちち こ せいしん き  
 光榮は父と子と聖神に歸す、

誦經) いま いつ よよ  
 今も何時も世々に、アミン。

ああおんちよう み もの われらなに もつ なんぢ しょう てん なんぢぎ ひ  
 嗚呼恩寵に満たさるる者よ、我等何を以て爾を稱せんか、天とせん、爾義の日を



てら 照したればなり、<sup>らくえん</sup>楽園とせん、<sup>なんぢか</sup>爾 枯れざる花を開きたればなり、<sup>はな ひら</sup>童貞女とせん、<sup>どうていちよ</sup>爾 貞操  
<sup>やぶ</sup>を壊らざればなり、<sup>きよ はは</sup>淨き母とせん、<sup>なんぢせい</sup>爾 聖なる 懐 <sup>ふところ</sup>に萬物の神たる子を抱きたればなり、  
<sup>かれ われら たましい</sup>彼に我等の 靈 <sup>すく</sup>の救われんことを祈り給え。<sup>いの たま</sup>

※第4週以外は次の讃詞を歌う。

わが あしを なんぢの こ と ば に か た め た ま え 、 も ろ も ろ の ふ ほ う の  
 我 足 爾 言 と ば に 固 た め た 給 え 、 諸 も ろ の 不 法 の

わ れ を せ い す る を ゆ る す な か れ 。 わ れ を ひ と の は く が い よ  
 我 制 許 母 れ 。 我 人 迫 害

り す く い た ま え 、 し か せ ば わ れ なんぢの め い を ま も ら ん。  
 救 給 え 、 然 我 爾 命 を 守

なんぢが か ん ば せ の ひ か り に て なんぢの ぼ く を て ら し 、 なんぢの  
 爾 顔 光 爾 僕 照 爾

お きて を わ れ に お し え た ま え 。 し ゅ よ 、 ね が わ く は わ が  
 律 我 誨 給 え 。 主 願 我

く ち は さ ん び に み て ら れ て 、 わ れ なんぢの こ う え い を う た い 、  
 口 讚 美 満 我 爾 光 榮 歌

ひ び に なんぢの い げ ん を う た わ ん。  
 日 爾 威 嚴 歌

※次ページ【 天主經 】へ。

※第4週、聖十字架が堂にある時は上の歌を歌わず、次の歌を歌う。

しゅ さ い よ 、 わ れ ら な んぢの じ ゅ う じ か に ふ く は い し 、  
 主 幸 我 等 爾 の 十 字 架 伏 拜

な んぢの せ い な る ふ く か つ を さ ん え い せ ん。  
 爾 の 聖 な る 復 活 を 讃 榮 い せ ん。



しゅさ い よ 、 わ れ ら な ん ぢ の じゅ う じ か に ふ く は い し 、  
主 宰 我 等 爾 十 字 架 伏 拜 祈 願



な ん ぢ の せ い な る ふ く か つ を さ ん え い せ ん 。  
爾 十 字 架 の 聖 徒 復 活 の 讃 美 歌



しゅさ い よ 、 わ れ ら な ん ぢ の じゅ う じ か に ふ く は い し 、  
主 宰 我 等 爾 十 字 架 伏 拜 祈 願



な ん ぢ の せ い な る ふ く か つ を さ ん え い せ ん 。  
爾 十 字 架 の 聖 徒 復 活 の 讃 美 歌

【 天主經 】

誦經) <sup>せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ</sup> 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

<sup>せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ</sup> 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

<sup>せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ</sup> 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

<sup>こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup> 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。アミン。

<sup>しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち</sup> 至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を

<sup>ゆる せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ</sup> 赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

<sup>しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ</sup> 主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

<sup>こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup> 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。アミン。

<sup>てん いま われら ちち ねが なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん</sup> 天に在す我等の父よ、願わくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天

<sup>おこな ごと ち おこな わ にちよう かに こんにちわれら あた たま われら</sup> に行わるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に

<sup>おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いぎない みちび なおわれ</sup> 債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我

<sup>ら きょうあく すく たま</sup> 等を凶惡より救い給え。

司祭) <sup>けだしくに けんろう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup> 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。

誦經) アミン。

<sup>われらもだ こころ ぐち せい てんし せい いた こうえい かみ はは うた</sup> 我等黙さず、心と口にて聖なる天使よりも聖にして、至りて光榮なる神の母を歌い、

これ う と しょうしんぢょ な そのじつ じんたい と かみ う つね われら たましい  
之を承け認めて生神女と爲す、其實に人體を取りし神を生みて、恒に我等の靈の

ため いの たま  
爲に禱り給えばなり。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ  
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ  
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

いづれ ひいづれ とき てん ち こうはいさんえい かんにん こうじ しぜん ぎじん  
何の日何の時にも、天にも地にも叩拜讚榮せられ、寛忍、鴻慈、至善にして、義人

あい ざいにん あわれ らいせい ふく やく よろづ もの すくい まね かみ なんぢ  
を愛し、罪人を憐み、來世の福を約して萬の者を救に招くハリストス神よ、爾

しゅ みづか わ こ とき いのり う われら いのち なんぢ いましめ むか たま われら  
主よ、親ら我が此の時の禱をも受け、我等の生命を爾の誠に向わしめ給え、我等

たましい せい からだ いさぎよ おもんばかり なお おもい きよ われら ことごと  
の靈を聖にし、體を潔くし、慮を直くし、思を淨くし、我等を悉くの

うれい わざわい やまい すく なんぢ せい てんし もつ われら めぐ われら そのかこみ まも  
憂と禍と疾より救い、爾の聖なる天使を以て我等を環り、我等が其圍に衛り

みちび しん いつ なんぢ ちか がた こうえい さと いた たま けだしなんぢ よよ  
導かれて、信の一なると爾の近づき難き光榮を悟るに至らせ給え、蓋爾は世世

あが ほ  
に崇め讃めらる、アミン。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ  
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

とうと ならび さか みさお やぶ かみことば う じつ  
ヘルヴィムより尊く、セラフィムに並なく榮え、貞操を壊らずして神言を生みし實の

しょうしんぢょ なんぢ あが ほ  
生神女たる爾を崇め讃む。

しんぷ しゅ な もつ ふく くだ  
神父よ、主の名を以て福を降せ、

司祭) かみ われら おん こうむ われら ふく くだ なんぢ かんばせ もつ われら てら ならび  
神よ、我等に恩を被らし、我等に福を降し、爾が顔を以て我等を照し、並に

われら あわれ たま  
我等を憐み給え、

誦經) アミン。

※続けて三時課を行う場合は、38ページに飛ぶ。

司祭) しゅ わ いのち しゅさい おこたり もだえ しのぎ むだごと ころろ われ あた なか  
主、吾が生命の主宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に與うる勿れ。

みさお へりくだり こらえ あい ころろ われなんじ ぼく あた たま  
貞操と、謙遜と、忍耐と、愛の情を我爾の僕に與え給え。

ああ しゅおう われ わ つみ み わ けいてい ぎ たま けだしなんぢ よよ あが ほ  
嗚呼、主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざるを賜え、蓋爾は世世に崇め讃

めらる、アミン。

かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま  
神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、

かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま  
神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、

しゅ わ いのち しゅさい おこたり もだえ しぎ むだごと ころろ われ あた なか みさお  
主、吾が生命の主 宰よ、怠 惰と、愁悶と、陵駕と、空談の 情 を我に與うる勿れ。貞操

へりくんだり こらえ あい ころろ われなんじ ぼく あた たま ああ しゅおう われ わ つみ  
と、謙遜と、忍耐と、愛の 情 を我 爾 の僕に與え給え。嗚呼、主 王よ、我に我が罪

み わ けいてい ぎ たま けだしなんぢ よよ あが ほ  
を見、我が兄 弟を議せざるを賜え、蓋 爾 は世世に崇め讃めらる、アミン。

まこと ひかり およ よ きた ひと てら かつせい もの ねが なんぢ  
眞の光 なるハリストス、凡そ世に來る人を照し且 聖にする者よ、願わくは 爾 が

かんばせ ひかり われら かがや われら これ よ ちか がた ひかり み え ねが  
顔の光 は我等に輝き、我等は是に依りて近づき難き 光 を見るを得ん、願わくは

なんぢ しじょう はは なんぢ しよせいじん きとう よ われら あし なんぢ いましめ おこな  
爾が至 淨の母と、爾が諸 聖人の祈禱に因りて、我等の足を爾の 戒 を行うに

むか たま  
向わしめ給え、アミン。



しょうしんぢよよ、われら なんぢの ぼくひ 婢 は わざわいよりたすけられ  
生 神女 我 等 爾 僕 婢 は 禍 わいよりたすけられ



しをも 以 っ て 、 なんぢよ かく 勝 つしょう すいにか ちうた とかんしゃと を たてま  
以 っ て 、 爾 克 勝 将 帥 にか ちうた とかんしゃと を たてま



つ る 。 かたれぬ ちか からを たもつ によ っ て 、 われら を もろもろ  
勝 權 能 有 由 っ て 、 我 等 を 諸

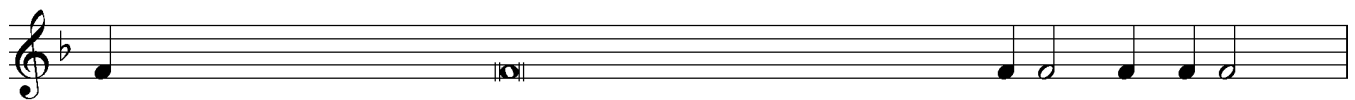


のくなんよりすく い 、 なんぢを うと うてよばしめ たま え 、  
苦 難 救 い 、 爾 を 歌 うてよばしめ たま え 、



よめならぬよめよ、よろこ べ 。  
聘 女 聘 女 慶

司祭) ハリストス・神・我等の 特よ、光 榮は 爾に歸す、光 榮は 爾に歸す、



こうえいは ちちと ことせい しんにきす、いまも いつも よよ に、アミ ン。  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今 も 何 時 世 世 に、アミ ン。



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ、ふくをくだせ。  
主 憐 主 憐 主 憐 福 降

司祭) ハリストス我等の眞の神は、其至淨なる母の祈禱と、無形なる尊き天軍、光榮に

して讚美たる聖使徒、( 某 ), 聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、

及び諸聖人の祈禱に因て我等を憐み救わん、彼は善にして人を愛する主なればなり、



アミ ン。

【 萬壽詞 】



か みよ、わがくにのてんの う、およびくにをつかさどる  
神 我 國 天皇 及 國 司



もの、われらのふしゅきょうダニイル、だいしゅきょうセラフィム、および  
者 我 等 府 主教 大 主教 及



ことごとくのせいきょうのハリストティアンら を、いくとせにもまもり  
悉 正 教 等 幾 歳 護



たまえ。

※早課・一時課終わり。

※三時課を続けて行う場合

司祭) <sup>しゅ わ いのち しゅさい おこたり もだえ しのぎ むだごと ころろ われ あた なか</sup>  
主、吾が生命の主 宰よ、怠 惰と、愁 悶と、陵 駕と、空 談の 情 を我に與うる勿れ。

<sup>みさお へりくだり ころえ あい ころろ われなんじ ぼく あた たま</sup>  
貞操と、謙 遜と、忍 耐と、愛の 情 を我 爾 の僕に與え給え。

<sup>ああ しゅおう われ わ つみ み わ けいてい ぎ たま けだしなんぢ よよ あが ほ</sup>  
嗚呼、主 王よ、我に我が罪を見、我が兄 弟を議せざるを賜え、蓋 爾 は世世に崇め讃

めらる、アミン。

<sup>かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま</sup>  
神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、

<sup>かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま</sup>  
神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、

<sup>しゅ わ いのち しゅさい おこたり もだえ しのぎ むだごと ころろ われ あた なか みさお</sup>  
主、吾が生命の主 宰よ、怠 惰と、愁 悶と、陵 駕と、空 談の 情 を我に與うる勿れ。貞操

<sup>へりくだり ころえ あい ころろ われなんじ ぼく あた たま ああ しゅおう われ わ つみ</sup>  
と、謙 遜と、忍 耐と、愛の 情 を我 爾 の僕に與え給え。嗚呼、主 王よ、我に我が罪

<sup>み わ けいてい ぎ たま けだしなんぢ よよ あが ほ</sup>  
を見、我が兄 弟を議せざるを賜え、蓋 爾 は世世に崇め讃めらる、アミン。

誦經) <sup>まこと ひかり およ よ きた ひと てら かつせい もの ねが なんぢ</sup>  
眞 の 光 なるハリストス、凡そ世に來る人を照し且 聖にする者よ、願わくは 爾 が

<sup>かんばせ ひかり われら かがや われら これ よ ちか がた ひかり み え ねが</sup>  
顔 の 光 は我等に輝 き、我等は是に依りて近づき難き 光 を見るを得ん、願わくは

<sup>なんぢ しじょう はは なんぢ しよせいじん きとう よ われら あし なんぢ いましめ おこな</sup>  
爾 が至 淨の母と、 爾 が諸 聖人の祈禱に因りて、我等の足を 爾 の 戒 を行 うに

<sup>むか たま</sup>  
向わしめ給え、アミン。

※三時課の「來れ、我等の王・・・」に続く。